

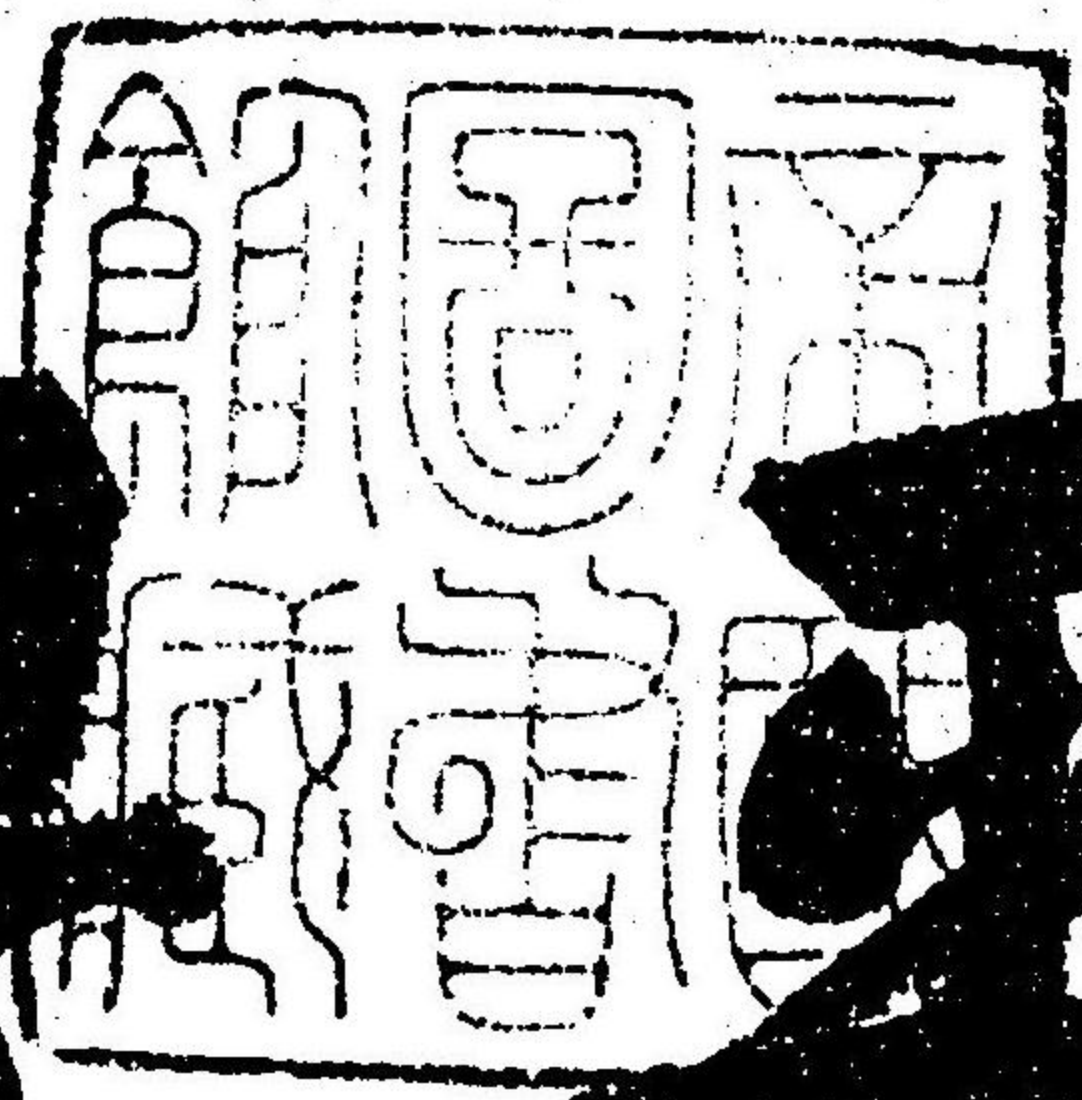
叢

取

林

全

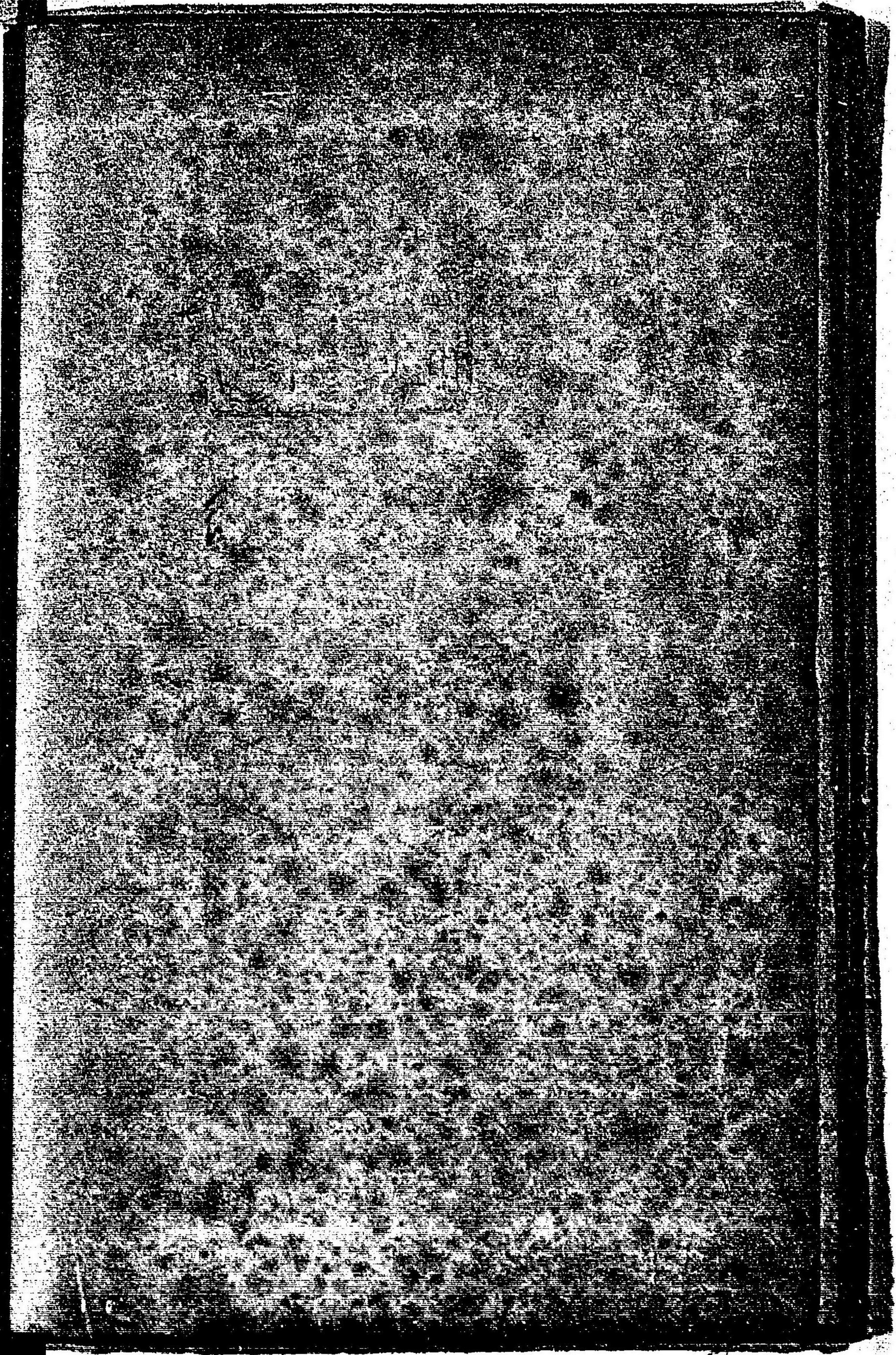
116
220



Vertical inscription in seal script, possibly a signature or date.

平
常
心
是
道

永
平
悟
由



例言

一 道人。東西の叢林。修行中。種々雑多の見聞を。備忘録に記し置きしか。此頃少閑を得て。其の乍入雲水の。利便に適するもの。五六を抽出して。一書となし。名けて叢林と稱し。發行を十方諸國の。師家諸大徳へ。奉告せしに。大に協賛を得て。茲に彌よ上梓の運に至りぬ。

一 問話のみ二百則餘を掲出し。問答熟語五十則を。法問は五十則。皆な學人の問話をも附し。即時適用せしむ。こは師家その人の。用ひ給ふものにあらされば。答話の必用を見ず。法問の問話は。はづす。手数を省かしめし耳已。

一 諸作例。一一その尊名を。署せさりしは。煩をいさひ。作意の不明

に涉るの恐れあれば。祝疏薦疏には。その尊名を記し。その時そ
の人を。想像摸索せしむ。

一 乘炬法語。奠茶點湯等の法語は。雲水たりとも。當任難讓。他場合
あり。之を活用すべし。亦た製作の作例に供ふ。

一 叢林茶話は。道人が在叢林中。諸方大徳の。垂示訓誨の。記憶せし
ものと。骨体こなし。附するに。愚案私見の。褸衣を纏綴せしめ。一
の紙衣筆僧を。現出せしめて。雲衲に智解開發。意氣鼓吹の。口宣
をなさしむ。

明治三十五年九月中院

即 通 道 人 敬 白

叢林目錄

- 普勸坐禪儀訓讀
- 坐禪箴全
- 發菩提心全
- 祇園正儀全
- 問話二百則
- 問答熟語五十則
- 法問五十則
- 諸作例
 - 拈竹筥と謝語
 - 轉衣法語
 - 晉山法語
 - 結制上堂法語
 - 三佛忌法語
 - 施餓鬼大般若
 - 各寺開山忌法語。疏
 - 賀偈
 - 賀轉衣偈
 - 賀住山轉住偈。疏
 - 轉法輪
 - 諸祖忌
 - 乘炬度纒法語
 - 各宿四時男女等

目録

- 作意と作例
- 法用の要目
- 叢林茶話

- 叢林と雲水
- 意氣と雅量
- 古則と公案
- 一心と成業
- 唯心吟
- 茶際論
- 禪數論
- 人才無限
- 心
- 五音
- 願心と願行
- 師家と隨心
- 坐禪と用心

目録畢

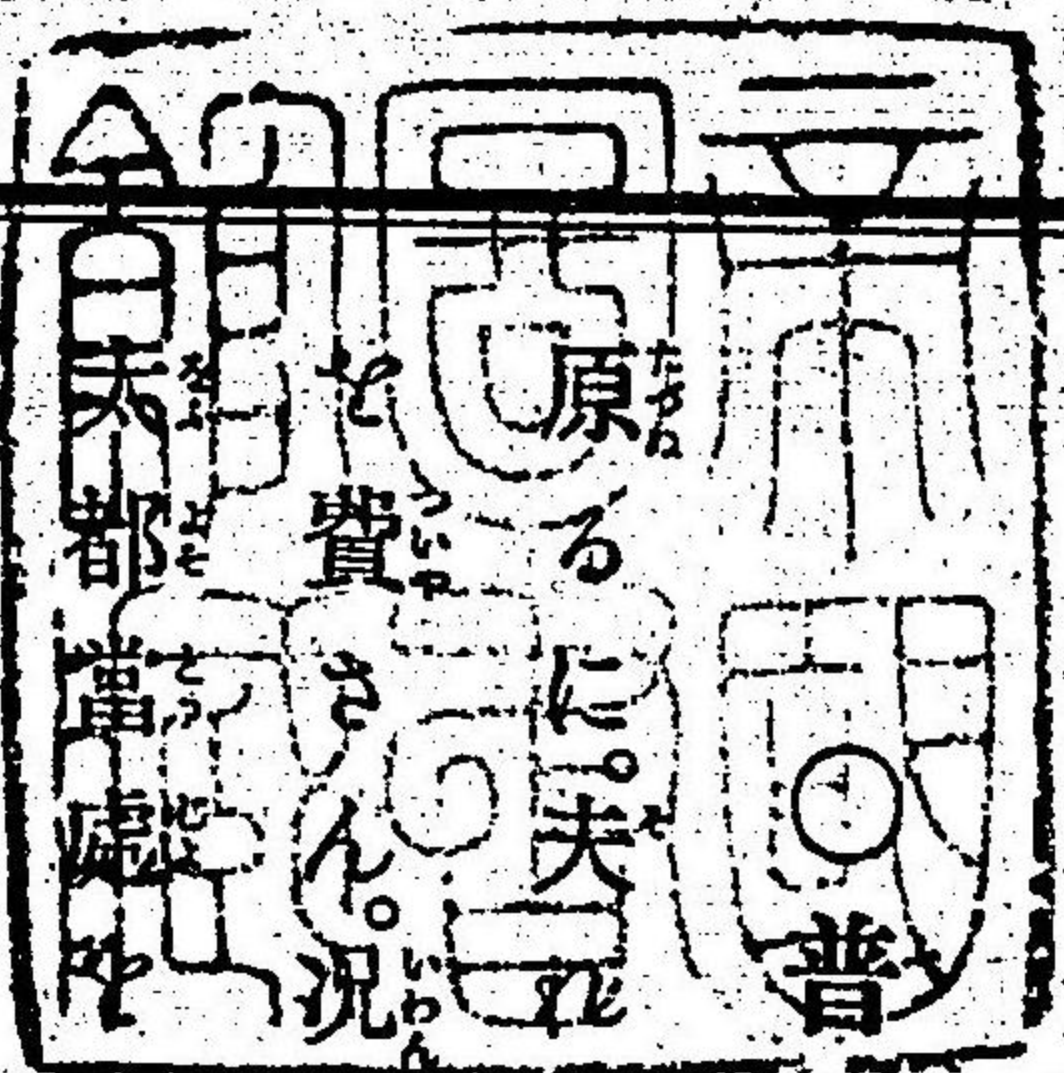
無 際 禪 師
原 坦 山 禪 師
原 坦 山 禪 師
原 坦 山 禪 師
原 坦 山 禪 師

唯心吟
無隱禪師

心心心更無別心。心外何物復升沈。美惡諸法人浸淫。
未嘗有實體可尋。留相相生日森森。達性性本剛於金。
巖前差路紛然臨。學者進步可不欽。有人厭喧兀似瘖。
欲捉水月迹飛禽。見性法門遠少林。德麟大患更不禁。
須知靈源不甚深。入流當處觀世音。超色越聲廓胸襟。
益物何啻傳說霖。勸君休膠柱調琴。宜訪名師求規箴。
昔日益公見老琛。唯心淵旨始知深。心信萬法攸豈管。
先覺學之惜寸陰。余今慙慙成此吟。豈敢爲人自保任。
家山千丈鬱岑嶽。中栖狻猊威難侵。駕言遊遊疾駸駸。
哮吼聲奮古來今。

叢林

即通道人 武田泰道編述



普勸坐禪儀

道本圓通。爭てか修證と假らん。宗乘自在。何ぞ功夫
や全體。迥かに塵埃と出ず。孰か拂拭の手段と信ぜん。
も毫釐も差あれば。天地懸かに隔たり。違順纒かに起れば。紛然と
して心と失す。たとへ會に誇り悟に豊にして。警地の智通とる。道
と得心と明めて。衝天の志氣と舉げ。入頭の邊量に逍遙すと雖と
も。幾んど出身の活路と虧闕す。矧んや彼祇園の生智たる。端坐六

年の蹤跡見つべし。少林の心印を傳ふる。面壁九歳の聲名尙ほ聞ふ。古聖既に然り。今人なんぞ辨ぜざる。所以に須らく。言を尋ね語を逐ふの。解行を休すべし。須らく回光返照の退歩を學すべし。身心自然に脱落して。本來の面目現前せん。恁麼の事を得んご欲せば。急に恁麼の事を務めよ。夫れ參禪は靜室宜しく。飲食節あり。諸縁を放捨し。萬事を休息して。善惡を思はず。是非を管すること莫れ。心意識の運轉を停め。念想觀の測量を止めて。作佛を圖ること莫れ。豈に坐臥に拘らんや。尋常坐處には。厚く坐物を敷き上に蒲團を用ゆ。或は結跏趺坐。或は半跏趺坐。謂ゆる結跏趺坐は。先づ右の足を以て。左の脛の上に安じ。左の足を右の脛の上に安ず。半跏趺坐は。但左の足を以て。右の脛を壓すなり。寛く衣帶を繋けて。齊

整ならしむべし。次に右の手を。左の足の上に安じ。左の掌を右の掌の上に安じ。兩の大拇指面ひて相拄ふ。正身端坐して。左に側ち右に傾き。前に躬り後に仰ぐことと得ざれ。耳と肩と對し。鼻と臍と對せしめんことと要す。舌上の腭に掛けて。唇齒相着け。目は須らく常に開くべし。鼻息微に通じ。身相既に調へて。欠氣一息し。左右搖振して。兀兀として坐定して。箇の不思議底を思量せよ。不思議底如何が思量せん。非思量此乃ち坐禪の要術なり。○所謂坐禪は習禪には非ず。唯是安樂の法門なり。菩提を究盡するの修證なり。公案見就して。羅籠未と到らず。若し此意を得ば。龍の水を得るが如く。虎の山に靠るに似たり。當に知るべし。正法自ら現前し。昏散先づ撲落することと。若し坐より起たば。徐徐として身を動し。

安詳として起つべし。卒暴なるべからず。嘗て觀る。超凡越聖坐脫立亡も。此力に一任すること。況んや復た。指竿針錘を拈ずるの轉機。拂拳棒喝を擧するの證契も。未だ是れ。思量分別の能く解する所にあらず。豈に神通修證の能く知る所とせんや。聲色の外の威儀たるべし。那ぞ知見の前の軌則に非ざるものならんや。然れば。則ち上智下愚を論ぜず。利人鈍者を簡ぶこと莫れ。專一に功夫せば。正に是れ辨道なり。修證自から染汚せず。趣向更に是れ平常なるものなり。凡そ夫れ自界他方。西天東地。等く佛印を持し。一ら宗風を擅にす。唯た打坐を務めて兀地に礙へらる。萬別千差と謂ふ。雖も。祇管に參禪辨道せよ。何んぞ自家の坐牀を拋却して。謾に他國の塵境に去來せん。若し一步を誤らば。當面に蹉過す。既

に人身の機要を得たり。虚く光陰を度ること莫れ。佛道の要機を保任す誰か浪りに。石火を樂まん。しかのみならず。形質は草露の如く。運命は電光に似たり。倏忽として便ち空じ。須臾に即ち失す。冀くは參學の高流。久しく摸象に習ふて。真龍を怪むこと勿れ。直指單的の道に精進し。絶學無爲の人を尊貴し。佛佛の菩提に合沓し。祖祖の三昧を嫡嗣せよ。久しく恁麼なることを爲さば。須らく是れ恁麼なるべし。寶藏自から開けて。受用如意ならん。

坐禪儀。畢

○坐禪箴

佛佛の要機。祖祖の機要。不思議にして現じ。不回互にして成ず。不思議にして現ず。其現ずること自から親し。不回互にして成ず。其成ずること自から證す。其現自から親し。曾て染汗なきの親。其親委すること無して證す。曾て正偏なきの證。其證圖ること無して工夫す。水清して脱落す。曾て正偏なきの證。其證圖ること無して工夫す。水清して地に徹す。魚行ひて魚に似たり。空闊して天に透る。鳥飛んで鳥の如し。

坐禪箴。畢

○發菩提心

右菩提心は多名一心なり。龍樹祖師の曰く。唯世間生滅無常を觀ずるの心も。亦菩提心と名く。然れば乃ち暫く此心に依れば。菩提心たるべきものか。誠に夫れ無常を觀する時。吾我の心生ぜず。名利の念起らず。時光の太た速なることを恐怖す。所以に行道は頭燃せ救ふ。身命の牢ざることと願聘す。所以に精進は翹足に慣ふ。たごひ緊那迦陵。讚歎の音聲を聞くも。夕の風耳を拂ふ。たごひ王嬭西施。美妙の容顏を見るも。朝の露眼を遮ぎる。已に聲色の繫縛を離れば。自から道心の理致に合はんか。往古來今。或は寡聞の士を聞き。或は少見の人を見るに。多くは名利の坑に墮して。永く佛道の命を失す。哀むべく惜むべし。知らずんばあるべからず。たご

ひ權實の妙典を讀むあり。たごひ顯密の教籍を傳ふるこごあるも。未だ名利を抛ずんば。未だ發心と稱せず。有が云く菩提心とは。無上正等覺心なり。名聞利養に拘はる可らず。有が云く一念三千の觀解なり。有が云く一念不生の法門なり。有が云く入佛界の心なり。かのごききの輩は。未だ菩提心を知らず。猥りに菩提心を謗す。佛道の中に於ひて。遠ふして遠し。試に吾我名利の當心を顧みよ。一念三千の性相を融するや否や。一念不生の法門を證するや否や。唯貪名愛利の妄念のみ有て。更に菩提道心の取るべきなきとや。古來得道得法の聖人。同塵の方便あり。雖ごも。未だ名利の邪念あらず。法執すら尙を無し。況んや世執とや。所謂菩提心とは。前來云ふ所の無常を觀する心。便ち是れ其一なり。全く狂者

の指さす所に非ず。彼の不生の念。三千の相は。發心以後の妙行なり。猥るべからざるか。唯暫く吾我を忘れて。潛に修す。乃ち菩提心の親きなり。所以に六十二見は。我を以て本と爲す。若し我見起る時は。靜坐觀察せよ。今我が身體内外の所有。何と以てか本と爲んや。身體髮膚と父母に稟く。赤白の二滴。始終是れ空なり。所以に我に非ず。心意識智壽命と繋ぐ。出入の一息。畢竟いかん。所以に我に非ず。彼此執るべき無きとや。迷ふ者は之を執り。悟る者は之を離れて。而も無我の我を計し。不生の生を執す。佛道の行はずべきと行ぜず。世情の斷ずべきと斷ぜず。實法を厭ひ。妄法を求む。豈に錯らざらんや。

發菩提心。畢

○祇園正儀

芙蓉山の楷祖もはら。行持見成の本源なり。國主より。定照禪師の號ならびに。紫袍をたまふに。祖うけず。修表具辭す。國主ごがめあれども。師つひに不受なり。米湯の法味つたはれり。芙蓉山に菴せしに。道俗の川湊するもの。僅に數百人なり。日食粥一杯なるゆゑに。せほく引去す。師ちかふて。赴齋せず。あるごき衆にしめして。いはく。夫れ出家は。塵勞を厭ひ。生死を脱せんごごを求めんが爲なり。心を休め念を息めて。攀縁を斷絶す。故に出家ご名く。豈に等閑の利養を以て。平生を埋没すべけんや。直に須らく兩頭撒開し。中間放下して。聲に遇ひ色に遇ふも。石上に華を裁るが如く。利と見名と見るも。眼中に屑を着るに似るべし。況んや無始より已來。是

れ曾て經歷せざるにあらず。又是れ次第を知らざるにあらず。頭を翻して尾ごなすに過ぎず。たぐかくのごごくなるに於て。何ぞ須らく苦苦に貪戀すべき。如今歇めつんば更に何れの時ごか待ん。所以に先聖人ごして。只今時を盡却せんごごを要せしむ。能く今時を盡さは。更に何の事か有ん。若し心中無事なるごごを得ば。佛祖猶是れ冤家の如し。一切の世事自然に冷淡にして。始めて那邊ご相應す。你見ずや隱山死に至るまで。冑へて人に見へす。趙州死に至るまで。冑へて人に告げず。匾擔は椽栗を拾ふて食ご爲し。大梅は荷葉を以て衣ご爲す。紙衣道者は只紙を披。玄太上座は只布ご著る。石霜は枯木堂ごたてて衆ごごもに坐臥し。只你が心ご死了せんごごを要す。投子是人ごして米ご辨し。同く煮て共に餐

せしめ。汝が事と省取することを得んことを要す。且く從上の諸聖が
 くの如きの榜樣有り。若し長處なくんば。如何んが甘ひ得てん。諸
 仁者若しまた斯に於て。體究せば。まことに不虧の人なり。若しま
 た肩へて承當せずんば。向後深く恐くは。力を費さん。山僧行業取
 ること無ふして。忝く山門に主たり。豈に坐ながら。常住を費して。
 頓に先聖の付屬と忘る可んや。今輒ち畧。古人の住持たる。體例に
 敷はんと欲し。諸人の議定して。更に山を下らず。齋に赴かす。化主
 と發せず。唯本院の莊課。一歳の所得を以て。均く三百六十分と作
 し。日に一分を取て。之を用ひ。更に人に隨て。添減せず。以て飯に備
 ふべくんば。飯と作し。飯と作して足らざる則んば。粥と作し。粥と
 作して足らざる則んば。米湯と作さん。新到相見も。茶湯のみ。更に

煎點せず。唯一の茶堂を置ひて。自ら去つて取用ふ。務めて縁と省
 ひて。專一に辨道せんことを要す。又況んや。活計具足し。風景疎な
 らず。華笑むことを解し。鳥啼くことを解す。木馬長へに鳴き。石牛
 善く走る。天外の青山色寡く。耳畔の鳴泉聲無し。嶺上猿啼ひて露
 中霄の月と濕し。林間鶴唳ひて風清曉の松と回る。春風起る時枯
 木龍吟し。秋葉凋みて寒林華散ず。玉階苔蘚の紋と鋪き。人面煙霞
 の色と帶ぶ。音塵寂爾として消息宛然たり。一味蕭條として趣向
 すべきなし。山僧今日諸人面前に向つて。家門と説く。已に是便と
 著けず。豈に更に去つて。陸堂入室し。拈槌豎拂し。東喝西棒し。眉と
 張り目と怒らして。痲病の發するが如くに。相似たる可んや。唯上
 座と屈沈するのみならず。況んや亦先聖に辜負せんや。汝見ず

や達磨西來して。少室山の下に到り。面壁九年す。二祖雪に立ち臂
 と斷つに至つて。謂つべし艱辛を受く。然れども達磨曾つて一
 詞と措了せず。二祖曾つて一句と問着せず。還つて達磨と喚んで
 不爲人と作し得てんや。二祖と喚んで不求師と做し得てんや。山
 僧古聖の做處と説着するに至る毎に。便ち身を容るに地なしと
 覺ふ。慚愧す後人の軟弱なること。又況んや百味の珍饈。遞ひに
 相供養せんをや。我は四事具足して方に發心すべしと道ふ。只恐
 くは做手脚迄ざること。便ち是れ生と隔て世と隔て去らんこ
 こと。時光箭に似たり深く爲に惜むべし。然かも是の如くなりこ
 雖ごも。更に佗人の長に従つて相度るにあり。山僧また強ひて佗
 と教ゆることを得ず。諸仁者還つて古人の偈を見るや。山田脱粟

の飯。野菜淡黄の羹。喫せば則ち君が喫するに従す。喫せざれば東
 西するに任す。伏して惟れば同道各自に努力せよ。珍重。これすな
 はち祖宗單傳の骨髓なり。高祖の行持とほし。いへごも。しばらく
 くこの一枚と舉するなり。いまわれらが晩學なる。芙蓉高祖の芙
 蓉山に修練せし。行持したひ參學すべし。それすなはち。祇園の正
 儀なり。

祇園正儀。畢

宗弊論

物之有弊也。其不可已乎。凡物故則盡矣。生多則害矣。釋迦老子已寂而幾三千祀。其靈其害不可勝言也。蓋經論之徒。沉淪于義解之際。遂喪老子之意。少林之傳。可謂惟得其宗。衣孟六傳而法充沙界。棒喝拳杖無非宗要。豈不亦盛哉。然而其卒亦不免有盡害也。方今天下之禪林安衆。收僧。其儀却倍。古昔而其弊尤已甚矣。諸方之稱知識者。多領禪和。恣應人天之供。或受江湖戒會之請。乘輿揚々傳食于天下。蓋古昔之佛祖。未必有如此之事。而今已有之。豈不其儀倍古昔乎。雖然其實非有尺寸之道。多是名利之賣。爾。豈不亦弊之已甚乎。且其儀先使禪和長坐不臥。名曰折身。而所謂知識者。執木樞之名警策者。打僧衆五三下。乃至數十下。名之曰接得。多唱古人言句。或誦自己見解。只是鴉鳴鵲噪。豈有交涉哉。其如此者。日或數次。遂自顛狂。又相罵辱。至其已甚者。打殺之人。問其旨趣。輒曰策勵耳。又以黃檗德山爲之辭。其中有癩氣狂心者。則曰某得入處。某有悟由。爲之印證。爲之設供。相引墮火坑。嗚呼噫嘻。謂之何哉。予嘗厭其群。復遭其害。今而每憶之。未嘗不流汗大息也。且夫古人之棒喝。既具其眼。故必有其用處。而且當機用之。未開胡喝亂棒。以爲人者也。求道者不可以不察也。知法者不以不辨矣。然而世之所謂知識。而緇流之巨擘者。至其下類。放慢邪恣。無不爲爾。今之爲衲子者。不亦難乎。

禪弊論

蓮藏海云。夫道非禪難究。禪非坐難得。故坐觀究理。謂之坐禪。且初學之禪。

須從師家之提携。猶如普之有相。然則不可不擇其人。蓋釋迦牟尼佛及達磨大師。至唐代諸師。其揆一也。宋朝已來。弊風特多。試論其概。曰唱和坐禪。公案坐禪。念佛坐禪。土地神坐禪。調伏坐禪等是也。所謂唱和者。師家以一二則話頭授學人。學人唱之以坐。若授以趙州無學人。乃唱曰無々々々。恰如雨鳩鳴。若授以雲門須彌山。乃唱曰須彌山々々々。恰如寒蟬之吟。若如此而得悟。雨鳩寒蟬亦得悟。所謂公案者。師家授以一二則公案。令學人工夫。學人工夫來演其意。其語若合師家意。乃印可證明。又更與佗公案。謂之透公案。多向佗語脉裡捏。恁夢中說夢。不知慚耻。恰如猿猴捉水月。若其如此而得道。猿猴亦得道。所謂念佛者。師家從來不曾實參。故未夢見佛法。以有痴福之報。錯爲叢林主人。或雖從規矩而坐禪。曾無一事之可示。乃請彌陀觀音。或文殊彌勒等。以爲本尊。坐中默唱其名。又念其咒。蓋依其力。此生悟道。來世生淨土。非但自作之。又令學人做之。聚頭坐禪。察其意之所存。恰如水母之欲假蝦目。而求食。若如此而得法。水母亦得法。所謂土地神者。譬如三家七村。裡石造土地神。無唱話頭。亦非因理觀察。乃示曰非思量無分別。兀々無事結跏趺坐。時到身心自然脫落。廓然大悟。若如此而大悟。石人土佛亦當大悟。所謂調伏者。譬如捕勒野馬。入蛇竹筒。乃示曰坐禪爲降伏煩惱妄想。若能如此。而開悟。勒馬筒蛇亦能開悟。上來五種坐禪。方是佛法中之魔事也。參禪之徒。若遇如此。展知識。速回避之。當如遇蟲毒之鄉。非特發心不正。萬行徒施。復且爲永劫輪迴之媒。若欲透脫生死。識得諸法實相。須從佛祖教。如理思惟觀察。是乃最初之方便也。予初讀之。絕倒。以其言之涉戲。

謹也。既而謂善知識一言一行。未嘗失其宗。後而嘆今世之弊。又且有加之。予試言其由。曰軌轍禪。番太禪。賤吏之執。答鞭者。邦俗呼爲番太。理窟禪。機關禪。剽輕禪等是也。所謂軌轍者。學得古人言句伎倆之迹。以爲佛法。若人問着則曰今日好天氣。或曰送過了也。或打席。擊拳。千狀萬態。無有窮極。故輕々問之。如作家。而其實非有分寸之道。譬如戲場之王公。其狀雖似其實至賤之匹夫耳。所謂番太者。令學人打坐。打之以木。極名曰接得。其狀如狂如顛。乃曰佛來亦打。魔來亦打。無眼學人讚之曰。此箇善知識。孤危峭峻。遂以德山臨濟爲目。嗚呼。似則似矣。其實風力客氣之維持而已。所謂理窟者。經論之理致。祖錄之義路。橫說豎解。以爲得其道。口給辨。佞賣弄人天。胡說亂道。以當宗旨。祖師曰。執事元是迷。契理亦非悟。事理雖異。其非悟也。一而已。所謂機關者。佛祖語中。以難解之處爲機關。以求壓人勝他。豈知古人或說理致。設機關。皆令學人發正見之方便哉。是故在作家。理致也。機關也。亦猶如臘月之扇。昔者趙州問投子曰。大死底人。却活時如何。子曰。不許。夜行投明須到。古人一問一答。而了矣。是弄機關。賭禪者。所未能夢見也。所謂剽輕者。其人輕薄。剽蕩。毫無實詣。磊々苴々。自稱自在。或撥無因果。輕慢里尼。問其意。則曰。逆順自在。而其奔利貪名。如飢鬼之赴飯籠。蓋此流類。皆是似而非者。苟不具正眼。難究其實。大凡佛法。在其人。則恁麼亦得。不恁麼亦得。若非其人。則恁麼亦失。不恁麼亦失。得失唯存于其人而已矣。

○問話二百則

- 如何なるか是れ佛
- 如何なるか是れ法
- 如何なるか是れ僧
- 師の答話を拜す
- 如何なるか是れ祖師西來意
- 達磨東土に來らず二祖西天に行かす
- 庭前の柏樹枝と又且つ如何ん
- 和尚の親切を謝す
- 如何なるか是れ如來禪
- 如何なるか是れ祖師禪
- 却つて兩般ありや
- 金言金句懐にし去らん
- 如何なるか是れ即心即佛
- 如何なるか是れ非心非佛
- 即心即佛と非心非佛とは是れ同か是れ別か
- 和尚の叮嚀を謝す
- 如何なるか是れ初修行脚の事

○人人脚下黄金の地と又且つ如何ん

- 師の親切なることを謝す
- 如何なるか是れ般若の體
- 如何なるか是れ般若の用
- 正當恁麼の時作麼生か是れ體用
- 老婆徹個
- 如何なるか是れ心身脱落
- 如何なるか是れ脱落身心
- 脱落脱落の時作麼生
- 此の語收いて懐にし去らん
- 如何なるか是れ向上の事
- 如何なるか是れ向下の事
- 向上向下を放下して一句を請ふ
- 金言語自用不盡にし去らん
- 如何なるか是れ生死
- 如何なるか是れ涅槃
- 生死を離れ涅槃に住せざる時如何ん
- 和尚歸方丈行者點茶來

以上皆末の語を退歩の語と云ふ十例を出す

- 如何なるか是れ煩惱
- 如何なるか是れ菩提
- 煩惱即菩提と何に依つて別別不別なる。以下退歩の語を尋す
- 如何なるか是れ本來の面目
- 人人具足箇箇圓成
- 如何なるか是れ神通
- 如何なるか是れ妙用
- 神通妙用必竟如何ん
- 如何なるか是れ教外別傳
- 如何なるか是れ不立文字
- 如何なるか是れ正法眼藏
- 如何なるか是れ涅槃妙心
- 如何なるか是れ涅槃妙心
- 如何なるか是れ天然自性心
- 如何なるか是れ恩を知る人
- 如何なるか是れ恩を知らざる人
- 如何なるか是れ恩を報ずる人
- 大悟底の人却つて迷ふ時如何ん

- 迷はざる時如何ん
- 一物不將來の時如何ん
- 本來無一物と言はば
- 作麼生か是れ安心立命
- 古人今人相去ること多少
- 如何なるか是れ眼橫鼻直
- 如何なるか是れ空手還鄉
- 四山相逼る時如何ん
- 東西南北草茫茫
- 始めて此の活通路を得たり
- 一子出家すれば九族天に生ずと是なりや否や
- 目蓮の母何に依てか地獄に墮す
- 己に是れ生天受樂し去る
- 不是心不是佛必竟如何ん
- 心佛一時に打破する時作麼生
- 百千萬境一時に来る時作麼生
- 四維上下身を容るゝに地なし
- 八風吹けども動せず天邊の月

- 如何なるか是れ十身調御
- 凡聖相去ること多少
- 靈山の一會何人が聞くことを得ん
- 未審靈山箇の什麼をか説く
- 三身の中那身か是れ説法す
- 三身は是れ一心なるか是れ多心なるか
- 學人乍人叢林請ふ師指示し給へ
- 茶裡飯裡別處に向はず
- 二六時中如何んが保任せん
- 從上の宗乘如何んが人に指示す
- 後代の兒孫何を將てか傳授せん
- 無心無心大無心の時作麼生
- 還つて喪身失命することなしや
- 妄想を除かず真を求めざる時如何ん
- 二六時中箇の何をか作さん
- 還つて昏散に沈淪することなしや
- 作麼生か是れ無明實性即佛性
- 東西の行脚如何んが用心せん

- 寶劍匣を出する時作麼生
- 出てざる時作麼生
- 手中に歸する時作麼生
- 如何なるか是れ不昧本來の人
- 沒絃の琴聲天を動し地を動す
- 巧を弄して拙と成すこと莫れ
- 古鏡未だ磨ざる時如何ん
- 磨ひて後如何ん
- 自己と古鏡と相照す時如何ん
- 大死底の人却つて活する時作麼生
- 生死去來應所自在と言はば
- 佛未だ出世せざる時如何ん
- 出世して後如何ん
- 建化門中の事は即ち問はず如何なるか是れ室中の事
- 忽ち識得する時作麼生
- 世尊拈華の意旨如何ん
- 伽葉微笑の意旨如何ん
- 拈華微笑必竟餘人所不見なりや否や

- 鳳凰池上還つて鳳凰鳴くこと有りや否や
- 聞く時は如何ん
- 文彩未だ生ぜざる時如何ん
- 不憚の時又作麼生
- 丹霞木佛を燒却する意旨如何ん
- 翠微羅漢に供養する意旨如何ん
- 實相無相何の論証がある
- 如何なるか是れ凡聖に墮せざるの一句
- 如何なるか是れ古今に關せざるの一句
- 如何なるか是れ事理に涉らざるの一句
- 高下たる山頂に立つ時如何ん
- 深遠たる海底に行く時如何ん
- 此くの如くなる則んば學人如何んが保任せん
- 萬法一に歸す一何れの處にか歸す
- 回互圓轉還つて歸處を失ふことなしや
- 學人劍に仗つて直に和尚の頭を切取る時作麼生
- 和尚如何んが安心立命せん
- 和尚還つて生死透脱の分ありや

- 如何なるか是れ大人の相
- 此人從來和尚と相見せしや否や
- 如何なるか是れ塵塵三昧
- 千峰嶽に向ひ百川海に赴く
- 作麼生か是れ聞聲悟道
- 作麼生か是れ見色明心
- 眼晴耳聾の時作麼生
- 如何なるか是れ超佛越祖の禪
- 驢屎馬糞に異ならず
- 蓮華未だ水を出でざる時如何ん
- 水を出で後如何ん
- 香芭冷透波心月綠葉輕搖水面風
- 和尚百年の後甚麼の處に向てか去る
- 某甲和尚に隨ひ去ることを得るや否や
- 被毛戴角還つて宿債を償ふことなしや
- 至尊至貴如何んが親近し得てん
- 直に無身を得て還つて親近し得てんや否や
- 親近し得て後作麼生

- 二鼠藤を侵す時如何ん
- 如何なるか是れ隱身の處
- 如何なるか是れ戒定慧
- 玄旨側り難し請ふ師仔細に指示せよ
- 萬里片雲なき時如何ん
- 霹靂忽ち到る時如何ん
- 雨晴一時に打破する時如何ん
- 一たび去つて來らざる時如何ん
- 一たび去つて却つて來る如何ん
- 來らず去らざる時如何ん
- 如何なるか是れ黃金佛
- 如何なるか是れ乾屎橛
- 黃金佛と乾屎橛と是れ同か是れ別か
- 如何なるか是れ奇特の事
- 天下の老和尚猶ほ鷹眼の疾を持す
- 孤峰獨宿の時如何ん
- 高ふして上なく廣ふして限りなし
- 骨に鑲ばめ肌銘して未だ恩を報せず

- 學人徑に行く時如何ん
- 當頭する時如何ん
- 當頭せざる時如何ん
- 如何なるか是れ本常の理
- 肯ふ時は即ち根塵を脱せず肯ざる時は生死に沈む
- 學人如何んが用心せん
- 和尚大慈大悲學人の爲に子細に示教せよ
- 鶴枯松に立つ時如何ん
- 雪千山を覆ふ時如何ん
- 滴水滴凍の時如何ん
- 如何なるか是れ至聖の命脈
- 如何なるか是れ列祖の大機
- 如何なるか是れ換骨の靈方
- 如何なるか是れ顯神の妙術
- 如何なるか是れ過去心不可得
- 如何なるか是れ現在心不可得
- 如何なるか是れ未來心不可得
- 必竟那箇心を以て得ることを求めん

- 如何なるか是れ超宗越格の正眼
- 如何なるか是れ烹佛煨祖の鉗錘
- 蚊子鐵牛を咬む時如何ん
- 蟾蜍掬車に向ふ時如何ん
- 鐵船水上に浮ぶ時如何ん
- 如何なるか是れ至道無難
- 如何なるか是れ唯嫌揀擇
- 和尚即今揀擇中に在るか明白裏に在るか
- 心有なれば曠劫凡夫に滯ると如何なるか是れ有心
- 心無なれば刹那妙覺に登ると作麼生か是れ無心
- 如何なるか是れ曹源の一滴水
- 心外無法滿目唯青山
- 他に分與する底のもの有りや否や
- 如何なるか是れ臨濟の棒
- 如何なるか是れ徳山の喝
- 棒喝何の要所が有る
- 如何なるか是れ本分宗師の眼目
- 如何なるか是れ本分宗師の作用

- 如何なるか是れ吹毛劍
- 如何なるか是れ提婆宗
- 如何なるか是れ函蓋乾坤の句
- 如何なるか是れ隨波逐浪の句
- 如何なるか是れ截斷衆流の句
- 木佛火を渡る時作麼生
- 金佛爐に投ずる時作麼生
- 泥佛水を渉る時作麼生
- 如何なるか是れ三界の大導師
- 如何なるか是れ四生の慈父母
- 古佛と露柱と交參の時作麼生
- 如何なるか是れ苦中樂
- 如何なるか是れ樂中苦
- 作麼生か是れ苦樂不到の處
- 金鎖未だ開さる時如何ん
- 開ひて後如何ん
- 金雞未だ鳴さる時如何ん
- 鳴ひて後如何ん

- 寒暑到來如何んが廻避せん
- 作麼生か是れ無寒暑の所
- 寒殺熱殺還つて出頭に分ありや
- 了了の時猶ほ未だ學すべきの法ありや
- 玄玄の處未だ幽明ならざる法ありや
- 意路不到の處如何んが識量せん
- 言詮不及の處如何んが説了せん
- 大修行底の事作麼生
- 心本と損傷なし如何んが修理せん
- 學人如何んが承當し去らん
- 如何なるか是三昧王三昧
- 佛祖の要機總べて此中に在りと是なりや否や
- 學人如何んが用心せん
- 如何なるか是れ不染汚の一着
- 正與塵の時這箇染汚か不染汚か
- 正に好し没蹤跡斷消息
- 如何なるか是れ乾坤未開の一句
- 直に得たり眼裏の塵砂耳裏の糞土

- 如何なるか是れ面壁九歳の勝跡
- 惡魔に功を盡して何の所得か有る
- 老大宗師他の履跡を弄すること勿れ
- 十月の清霜四野に周し
- 如何なるか是れ成佛の事
- 求むるが是か求めざるが是か
- 正當惡魔の時成佛と不成佛と還つて斷訛ありや
- 如何なるか是れ貪瞋癡
- 提持するが是か放下するが是か
- 煩惱即菩提なることを證得す
- 如何なるか是れ佛
- 如何なるか是れ道
- 如何なるか是れ道中の師
- 如何なるか是れ善知識底の所爲心
- 如何なるか是れ心相
- 如何なるか是れ心體
- 如何なるか是れ四大の毒蛇
- 如何なるか是れ地水火風

- 如何なるか是れ兜率の境
- 如何なるか是れ境中の入
- 同聲相應する時如何ん
- 同氣相求むる時如何ん
- 一進一退の時如何ん
- 百花未だ開ざる時如何ん
- 開ひて後如何ん
- 如何なるか是れ和尚の妙藥
- 喫する時如何ん
- 魚陸地に遊ぶ時如何ん
- 却つて碧潭に下る時如何ん
- 如何なるか是れ第一句
- 如何なるか是れ第二句
- 如何なるか是れ第三句
- 如何なるか是れ解脱
- 如何なるか是れ透脱の一路
- 如何なるか是れ無縫塔
- 如何なるか是れ塔中人

- 如何なるか是れ菩提變通の事
- 變通して後如何ん
- 如何なるか是れ有中の無
- 如何なるか是れ無中の有
- 如何なるか是れ有中の有
- 如何なるか是れ無中の無
- 諸聖何を以て命と爲す
- 還つて向上の事わりや否や
- 古殿佛なき時如何ん
- 修證を假らす如何んが成することを得ん
- 言語道断の時如何ん
- 心行所滅の時如何ん
- 家賊防ぎ難き時如何ん
- 識得して後如何ん
- 是れ還つて他の安心立命の處なることなしや
- 萬法何れより生ず
- 不顛倒の時萬法何れの處にか在る
- 即今顛倒に住するか不顛倒に屬するか

- 如何なるか是れ枯木裏の龍吟
- 如何なるか是れ觸摸裏の眼睛
- 相逢ふて相知らざる時如何ん
- 世間何物か至尊至貴なる
- 出世間何物か最尊無上なる
- 世出世間何物か無等等實なる
- 如何なるか是れ大富貴底の人
- 如何なるか是れ赤貧窮底の人
- 二龍珠を争ふ誰か是れ得る者
- 得る者如何ん
- 得ざる者如何ん
- 眞は妄に依つて立ち妄より眞を顯すと是なりや否や
- 如何なるか是れ眞
- 如何なるか是れ妄
- 此の二途を離れて如何んが圓成に合する事を得ん
- 沙門豈に是れ大慈悲心を具する底ならんや
- 忽ちに六賊に遇ふ時如何ん
- 正當如何んが大慈悲心を具せん

- 如何なるか是れ功を轉じて位に就く
- 如何なるか是れ位を轉じて功に就く
- 如何なるか是れ功位齊しく彰る
- 如何なるか是れ功位俱に隠る
- 如何なるか是れ君
- 如何なるか是れ臣
- 如何なるか是れ君臣に向ふ
- 如何なるか是れ君臣を視る
- 如何なるか是れ君臣道合する
- 佛力法力は即ち問はず如何なるか是れ慧力
- 菩提本樹に非ず甚度の處に向つて手を下さん
- 今日始めて未聞を聞くことを得たり
- 夢裏明明として六趣あり覺めて後空空として大千もなしと端的那邊にか有る
- 無夢無相無見無聞の時正睡著主人公那邊にか有る
- 正與度の時誰か是れ聖人誰か是れ凡夫
- 老和尚の正眼如何んが辨別せん
- 直に得たり淨心去つて心月の現することを

- 無爲無事人猶は未だ金鎖の難ありと未審過何れの處にか有る
- 學人如何んか進歩承當せん
- 驢馬事遠つて是れ佛事佛行なることを知る
- 牛頭未だ四祖に見へざる時甚麼に依てか百鳥華を銜くんで獻す
- 見へて後甚麼としてか華を銜まざる
- 奇特遠つて修行の障礙なりや
- 満口に道ひ得ざる時如何ん
- 満法と侶ならざる時如何ん
- 如何なるか是れ學人轉身の處
- 如何なるか是れ學人親切の處
- 總に徳麼ならざる時如何ん
- 一切衆生悉有佛性と何に依つてか六道に墮在す
- 如何なるか是れ六道出離の一着
- 學人如何んが出頭し得てん
- 知中の忘忘中の知
- 不思議不思議那箇か是れ本來の面目

- 直に得たり面目露堂堂
- 杜鵑聲中に新夏來る
- 道は知に屬せず不知に屬せずと必竟那邊に屬す
- 如何なるか是れ知不知不屬底の一着
- 前頭に記取して後頭に忘却す
- 對面千里
- 向上事は學人能する處に非ず如何なるか是れ向下の事
- 混泥未分の時還つて向上向下有りや又否や
- 直に得たり面前背後置くに處なし
- 大死一番骨に徹して始めて得てんと如何んが大死一番し去らん
- 出生入死大自由底の人還つて修行を要するや否や
- 百尺竿頭如何んが歩を進めん
- 無上上を坐斷すと如何なるか是れ無上上
- 無等等を踰越すと如何なるか是れ無等等
- 閑言語還つて思量分別に涉ることなしや
- 二六時中箇死人に如同せよと死人還つて功ありや

- 即今和尚底作麼生
- 某甲も又和尚と同參
- 如何なるか是れ唯一乘法
- 己に是れ一乘法何に依つて頓漸顯密の別か有る
- 如何なるか是れ佛法の大意
- 諸惡莫作衆善奉行と又且つ如何ん
- 三才の童子何に依つて言ふこと易く八十の老翁何に依つて行ひ難き
- 人人皆な如來の智慧徳相を具すと如何なるか是智慧徳相
- 甚麼に依つて徳不徳の差別かある
- 大小の宗師水中に痕を留むるに似たり
- 參は須らく實參なるべしと如何なるか是實參
- 語は須らく實語なるべしと如何なるか是實語
- 和尚親しく手を採り玉へ
- 如何なるか是れ七尺單前の事
- 非思量底如何んが思量せん
- 無分別の處還つて佛性を了解するの分ありや

- 一切經は皆な此經より出すと如何なるか是此經
- 徳麼なる則んば出息衆縁に涉らず入息陰界に居せ
- 和尚某甲の爲に轉讀一返し玉はんことを
- 一處透れば千所萬所一時に透ると忽ち此關を透得する時如何ん
- 乾坤未兆の時消息那裏にか有る
- 始めて此關を透得することを得たり
- 道は須臾も離る可らず離るべきは道に非ずと如何なるか是れ道
- 不離不即底作麼生
- 十二時中如何んか保任せん
- 放行する則んば瓦礫も光を生じ把住する則んば眞金も色を失すと和尚還つて此手段ありや
- 旗を輪く謀主に深意あり
- 明かに棧道を修して暗に陳倉を渉る
- 如何なるか是れ空劫己前の消息
- 還つて今時に墮在することなしや

- 纒かに是非あれば紛然として心を失す還つて答話の分ありや
- 還つて是非に墮在することなしや
- 蚯蚓切つて兩段と爲す未審佛性何頭にか有る
- 兩頭共に動くを如何せん
- 兩頭共に有らば兩心同體か同體兩心か
- 人人盡く光明の在る有り作麼生是和尙の光明
- 日月星辰も一時に埋却了
- 正に知る和尙の光明蓋天蓋地なることを
- 十方薄伽梵一路涅槃門未審路頭何れの處にか有る
- 無東西の處何んぞ南北あらん
- 却火洞然大千俱に壞す未審道箇壞か不壞か
- 恁麼なる則んは他に隨ひ去るや
- 三千七百の公案は即ち問はず如何なるか平常の事
- 大衆分中又作麼生
- 鐘鼓分明耳目炳煇敢て問ふ鐘未だ鳴らず鼓未だ響かず消息聞くことを得べきや否や
- 鐘已に鳴り鼓已に響き景象見ることを得べきや否

- 視て見へず聴て聞ざるの端的一句作麼生
- 生死到來如何んが廻避せん
- 自尿自屎し能ざる人出來る時和尙如何んが手を下さん
- 非思量は則ち坐禪の要術なりと坐禪還つて木人石女に類することなしや
- 木人石女何の能所か有る
- 徹骨徹髓
- 未だ世界有らず早く此性有り世界壞する時此性不壞と作麼生か是れ不壞性
- 壞不壞に涉らざる底の一句作麼生
- 世界有り此性あり此性有つて世界無し何れの處にか安住す
- 十方世界山河大地瓦解氷消の時什麼の處に向つて安身立命せん
- 恁麼の地も又瓦解氷消と言は
- 始めて此安心の好所を得たり

- 如何なるか是れ三灣四曲底の禪
- 如何なるか是れ戴花挿柳底の禪
- 如何なるか是れ奇異古怪底の禪
- 如何なるか是れ隱藏秘密底の禪
- 佛法元來不思議なしと三明六通是れ何の作用す
- 五百の應現是れ什麼の人
- 如何なるか是れ正中偏
- 如何なるか是れ偏中正
- 如何なるか是れ正中來
- 如何なるか是れ兼中至
- 如何なるか是れ兼中到
- 如何なるか是れ兼中不兼人
- 如何なるか是人境俱奪
- 如何なるか是人境俱不奪
- 凡う言句あれば盡く染汚に屬す如何んが不染汚なることを得ん
- 口鼻孔の如く鼻孔口の如し

- 如何なるか是實中實
- 如何なるか主中主
- 如何なるか主中實
- 如何なるか主中主
- 一步密に移る時は支路轉す如何なるか是一歩密に移る底
- 如何なるか是一歩密に移らざる底
- 一步を遷れば當面に蹉過すと學人如何んが歩を移さん
- 至理の一言凡を轉じて聖と成すと作麼生か至理の一言
- 鈍鐵の俗漢如何んが接取せん
- 能凡能聖必竟那邊に屬す
- 心意識の運轉を停め念想觀の側量を止むと必竟何物か工夫す
- 濃濃溟溟返つて昏沈に滯醉することなしや
- 那箇か是れ心意識那箇か是念想觀
- 元來和尙に問者來

- 草木國土同時成道と四十九年箇の何をか説く
- 四十九年一字不説ならば五千の經卷は何の文字ぞ
- 釋迦老師還つて頭上頭を案することなしや
- 有心を以て得べからず無心を以て得べからずと必竟那箇心を以て求め得ん
- 言語を以て會すべからず寂黙を以て通すべからずと又何を以て會取せん
- 從來求むれども得ず請ふ師方便
- 法界に身を容れず師今還つて某甲を見るや否や
- 問あり答あり蓋し是尋常
- 常識を離れて一句を指示せよ
- 玄を談せず妙を説かず此二途を去つて如何んが指示せん
- 雁長空を過ぎて影寒水に沈む
- 放行把住縛べて抛下して一句作麼生
- 見性の人即ち成佛ならば佛に六通あり見性の人即ち六通ありや
- 見性は即ち一通何ぞ六通と言はんや

- 和尚大慈大悲方便して子細に説示せよ
- 達磨西來風なきに涙を起し世尊拈華一場の敗闕と此意作麼生
- 拈華微笑なく西來傳法なき時一切の群類如何んが出離せん
- 九十六種道儒の法は是れ出離解脱の分ありや否や
- 般若を學ぶるの善處は大根器を具し大智慧を有して始めて得てんと如何なるか是れ大根器
- 如何なるか是れ大智慧
- 佛種子たることは大根器大智慧のみならんや
- 如何なるか是れ明慧下の古教照心
- 如何なるか是れ僧堂前の坐禪辨道
- 古教照心還つて是思量分別の種子に非ざらんや
- 坐禪辨道還つて是痴沈坐睡の閑模樣なるならんや
- 是非不到の處還つて有有り無有り道箇に觸着せざる底の一句子如何んが説示せん
- 是れ什麼の句ぞ

- 奉重傍參籬内を犯さず
- 寰中禪師曰く一丈を説得せんより一尺を行取するに如かずと如何なるか是れ一尺
- 一尺を説得せんより一寸を行取するに如かずと如何なるか是れ一寸
- 如何なるか是れ説取行不得底
- 如何なるか是れ行取説不得底
- 一大藏經は唯是箇之字と如何なるか是箇之字
- 點畫分明に道理なしと又作麼生
- 拈槌豎拂還た宗乗中の事に當るや否や
- 古人今人宗師家の意旨如何ん
- 必竟宗乗中の事作麼生
- 如何なるか是れ無位の真人
- 若し無位のみ真人なる時は有位は盡く真人に非らざらんや
- 果然果然
- 一人有り生死を捨てず涅槃を證せず和尚御つて提撕するの分ありや否や

- 涅槃是れ生死生死是れ涅槃として還つて透脱の分ありや否や
- 如何んが用心し如何んが行取せん
- 心處の路を行せずと如何なるか是れ心處の路
- 本來の衣を掛けすと如何なるか是れ本來の衣
- 大悲の千手千眼那箇か是れ正眼
- 許多の千眼何の用をか爲す
- 無手無眼底の人還つて大悲と交參する時如何ん
- 如何なるか是れ頭
- 如何なるか是れ尾
- 尾有つて頭なき時如何ん
- 頭有つて尾なき時如何ん
- 直に頭尾相稱ふことを得る時如何ん
- 三世の諸佛有ることを知らず狸奴白拈却つて有ることを知ると此意作麼生
- 三世の諸佛何に依つて有ることを知らざる
- 狸奴白拈何に依つて有ることを知らざる
- 如何なるか是れ殺人刀

- 如何なるか是れ活人劍
- 若し殺を論ずる時は一毫を傷せずと何に依てか什麼なる
- 若し活を論ずる時は喪身失命すと何に依てか什麼なる
- 色身取壞如何なるか是れ堅固法身
- 清風明月還た是れ一般なりや
- 君は西秦に向ひ我は東魯に之く
- 通身是眼見不到の時作麼生
- 通身是耳聞不到の時作麼生
- 通身是心鑿不出の時作麼生
- 無師の智を以て無作の妙用を發すと作麼生かは無師の智
- 無縁の慈を以て不請の勝友と作すと作麼生か是れ無縁の慈
- 獨立無伴還つて自己の己見に埋却了なることなからんや
- 即今和尚底又作麼生

- 萬法と侶ならざる人は是れ什麼の人
- 即今日用の事作麼生
- 茶裡飯裡別處に向はずして可ならんや
- 眞修は勤することを得ず忘することを得すと學人如何んが修し如何んが忘せん
- 勤は執着に近く忘は無明に落つと又且つ如何ん
- 必竟如何んが執着と無明とを脱却し去らん

晋山及び結制上堂

- 如何なるか是れ晋山(結制)上堂の一句
- 鶴五葉を喰んで此門に入る
- 吉祥吉祥大吉祥
- 聖人出世する時は風條を鳴さす雨塊を破らす今日和尚上堂何の奇特かある
- 青天白日怒雷走る
- 南山に鼓を打ては北山に舞を爲す
- 和尚の上堂何人に繼承す

- 萬象之中獨露身と又且つ如何ん
- 無師の智無功の徳還つて際涯を絶することを
- 如何なるか是れ本身の盧遮那
- 古佛新佛相去ること多少ぞ
- 華は發く無根の樹魚は跳る萬仞の峰
- 如何なるか是れ須彌樹上の風光
- 曲椽木上鬼眼睛を弄して何の奇特か有る
- 慈舟棹さす清波上劍峽徒に勞して木鷄を放つ事を
- 如何なるか是れ聖諦第一義
- 已に是れ第一義底何に依つて二と説き三と説く
- 大衆證明學人禮謝
- 如何なるか是れ和尚の家風
- 天堂に遊化し地獄に濶歩する底の分ありや
- 溪聲廣長舌山色清淨身
- 和尚今日大に鑪錫を開いて凡を鍛へ聖を鍊ふ忽ち個の非凡非聖底の人出で来る和尚作麼生か鍛鍊せん
- 能凡能聖底の人來る時又作麼生
- 始めて知る和尚に此大特伎倆あることを

- 師未だ出世せざる時如何ん
- 出世して後又作麼生
- 出と未出と還つて分不分ありや
- 拈匙豎拂は即ち且く置く和尚如何んが人の爲にせん
- 作麼生か是れ爲人の處
- 龜茶澆飯還つて滋味の長きことを知る
- 未だ此座に登らざる時如何ん
- 登つて後如何ん
- 愚人は境を除て心を忘せず智者は心を忘して境を除かずと和尚即今又作麼生
- 倒に少林の無孔笛を把て逆風に吹き了て順風に吹
- 諸佛の出世各一華に座す和尚上堂何の祥瑞か有る
- 人人鼻孔透天箇箇壁立萬仞
- 牆壁瓦礫直に放光明

授戒戒場

- 摩尼珠人識らす如來藏裡に親く收得すと如何なるか是れ藏

- 如何なるか是れ珠たま
- 學人如何んか收得せん
- 百千萬億の諸佛但其名を聞く未審何れの國土にか住す
- 如何なるか是れ諸の國土
- 百千萬億の諸佛己に現成し來る
- 向上の一路千聖不傳と和尚此何にをか傳授す
- 七日の行持總に是れ閑活計なることなしや
- 罪科何れの處にか歸す
- 皆大歡喜信受奉行
- 三世の諸佛何れの處よりか來る
- 三世の諸佛何れの處にか去る
- 能禮所禮證空寂
- 持戒何の功德か有る
- 破戒何の功德か有る
- 正に知る不昧因果業報不轉なることを
- 佛心は法界に充滿すと迎聖送聖は何の閑模樣や
- 和尚又是河頭賣水の人

- 一會皆な共に波羅提木叉を得たり
- 佛求に着せず法求に着せず衆求に着せずと此意作麼生
- 證佛是れ何の求所なるや
- 大勞生大勞生
- 如何なるか是れ無念の念
- 如何なるか是れ無行の行
- 如何なるか是れ無言の言
- 如何なるか是れ無修の修
- 一切の衆生自性本と清淨なりと懺悔還つて眞着ならざらんや
- 一切の業障は皆な妄想より生ずと專念の信者還つて受戒を要するや否や
- 一回擧着すれば一段新なり
- 如何なるか是れ一戒光明
- 如何なるか是れ金剛法戒
- 意識色心を喪失する底の人如何んが接取せん
- 有情非情同時に正に蓮華臺に座す

問答熟語

(俗にはたらき活動の意)

- 師云、恁麼消息從那裡得來
- 學答云 元來不出和尚脚下
- 學答云 人人具足箇箇圓成
- 學答云 我這裡從來七通八達
- 學答云 元來無會處
- 師云、天地撲落時作麼生
- 學答云 正好立命安心處
- 學答云 一葉落知天下秋
- 學答云 好箇時節
- 學答云 一片白雲橫谷口
- 學答云 一任撲落
- 師云、更有向上事在
- 學答云 作麼生是向上事
- 學答云 舌頭長也
- 學答云 枕上更無閑夢安
- 師云、更進一步

- 學答云 和尚歸方丈
- 學答云 脚跟不轉地
- 學答云 退步承當特地新
- 學答云 大勞生
- 學答云 某甲不用閑技倆
- 師云、誰是知音
- 學答云 匝地清風只自知
- 學答云 燈籠露柱
- 學答云 露地白牛笑點頭
- 學答云 不非老釋迦即和尚
- 師云、莫動着
- 學答云 元來元來
- 學答云 直得不動着
- 學答云 八風雖吹不動天邊月
- 師云、汝試見破看
- 學答云 學人無恁麼技倆
- 學答云 和尚還真像他
- 學答云 見破了

○學答云 眼睛耳聾
 ○學答云 要言口掛壁上
 ○學答云 千變萬化皆如是
 ○師云、入門早見額
 ○學答云 未跨門關早勘賊
 ○學答云 眼花不少
 ○學答云 要見白雲萬里
 ○學答云 尙是眼裏塵沙
 ○學答云 學人三日眼睛
 ○師云、昨夜爲汝說
 ○學答云 果然賊心已露
 ○學答云 學人因甚自救不了
 ○學答云 某甲三日耳聾
 ○師云、爲汝不能說
 ○學答云 空中怪聽金錫鳴
 ○學答云 開了也
 ○學答云 木人正歌石女立舞
 ○學答云 不說處却妙音

○學答云 肝膽早向他吐露了
 ○學答云 早是拖泥帶水
 ○師云、汝救山僧
 ○學答云 到這裡無容身地
 ○學答云 此老漢似挑燈追賊
 ○學答云 此野狐精
 ○師云、作麼道棒頭迴避處
 ○學答云 幸得和尙一坐具地
 ○學答云 不可說不可說
 ○師云、近前來
 ○學答云 擬向即背
 ○學答云 相見了也
 ○學答云 和尙釣長三尺
 ○學答云 大小老漢眉毛落地
 ○學答云 進無門退無路
 ○學答云 透塊者非真獅子兒
 ○學答云 對面却爲千里隔
 ○師云、一二三四五六

○學答云 大小老漢算數不少
 ○學答云 尙是落在七八片
 ○學答云 是何數量
 ○師云、上座有何境界
 ○學答云 學人從來不受他瞞
 ○學答云 從來不藏和尙
 ○學答云 伴白雲隨流水
 ○師云、作麼道上座面目
 ○學答云 依舊眉毛橫眼上
 ○學答云 鼓鳴法堂飽齋齋堂
 ○學答云 困來合眼飢來喫飯
 ○學答云 茶裡飯裡不向別處
 ○學答云 叉手當胸唯是是
 ○師云、遲了八刻
 ○學答云 和尙逢閃電
 ○學答云 閃電機用作何用
 ○學答云 靈山授記屬何人
 ○學答云 門外金剛不墮遲速

○師云、作麼道安心立命處
 ○學答云 湖南潭北
 ○學答云 不道不道
 ○學答云 陰陽不到處一斤好風流
 ○學答云 山是山水是水
 ○學答云 趙州南石橋北
 ○師云、作麼道上座行履
 ○學答云 逢飯喫飯逢茶喫茶
 ○學答云 和尙被一撥無藏身地
 ○學答云 獨坐大雄峰
 ○學答云 行到水窮處坐看雲起時
 ○師云、箭過新羅
 ○學答云 落所作麼生
 ○學答云 可惜乎不當的
 ○師云、汝試道將一句來
 ○學答云 箭過新羅
 ○學答云 黑漆崑崙夜裏走
 ○學答云 鑑在機前

○學答云 八角磨盤空裏走
 ○學答云 面前香爐子笑點頭
 ○師云、作麼道汝見處
 ○學答云 大地黑漫々
 ○學答云 眼界無一法可看
 ○學答云 偏界不會藏
 ○學答云 烏黑鷲白
 ○學答云 忘前失後
 ○師云、汝近日在什麼、言句
 ○學答云 說了也
 ○學答云 叙去久
 ○學答云 說似一物即不中
 ○學答云 用葛藤爲何乎
 ○師云、何處去
 ○學答云 三世諸佛識不得
 ○學答云 忘却了也
 ○學答云 恐和尚脚下
 ○學答云 雲深不知處

○師云、本來無一物
 ○學答云 喫茶去
 ○學答云 面前底是何物
 ○學答云 面前有拄杖在
 ○學答云 呵呵大笑
 ○師云、是何道理
 ○學答云 大小老漢真蹉過
 ○學答云 某甲只如是
 ○學答云 始隨芳草去復追落花飯
 ○師云、當面真蹉過
 ○學答云 今日逢和尚蹉過
 ○學答云 元來元來
 ○學答云 退步承當特地新
 ○師云、山僧不會
 ○學答云 果然真把己露
 ○學答云 此老漢眉毛八字打開
 ○學答云 海深不見底
 ○學答云 山高不露頂

○學答云 谷深杪柄長
 ○師云、此中誰是知音
 ○學答云 道得、辜負和尚
 ○學答云 若識琴中趣、何弄絃上聲
 ○學答云 知音更有青山外
 ○師云、汝名什麼
 ○學答云 從來不知名
 ○學答云 一任他喚
 ○學答云 從來無形名、天真忘性相請師安名
 ○學答云 三世諸佛安名不及
 ○師云、好箇消息
 ○學答云 大小老漢不瞞他、却瞞自己
 ○學答云 檢人眼正在機前
 ○學答云 退身三步
 ○學答云 逢師點檢
 ○師云、照顧脚下
 ○學答云 大地無寸土
 ○學答云 莫勞他脚跟

○學答云 脚下線斷百自由
 ○學答云 正好脚下七縱八橫
 ○學答云 照顧脚下終不可得
 ○師云、一棒
 ○學答云 美食不當飽人喫
 ○學答云 徹骨徹髓
 ○學答云 天下清僧跳不出
 ○學答云 老婆親切
 ○學答云 虚空碎成七八片
 ○師云、果然果然
 ○學答云 逢勸破
 ○學答云 謝證明
 ○學答云 莫慢他
 ○學答云 龍蛇易辨、衲子難瞞
 ○師云、不識
 ○學答云 大尊貴生
 ○學答云 坐中又有江南客

○學答云 低聲低聲
 ○學答云 不識尤親切
 ○師云、放下着
 ○學答云 皆大歡喜信受奉行
 ○學答云 開口十萬八千
 ○學答云 一物不將來放下此何箇
 ○師云、會也
 ○學答云 要會落第二頭
 ○學答云 徹底不會
 ○學答云 某甲從來不到其地
 ○學答云 李白桃紅
 ○學答云 柳綠花紅
 ○師云、聞也
 ○學答云 劍去久
 ○學答云 學人三日耳聾
 ○學答云 無心不得聞
 ○學答云 孤峰無耳却知音
 ○學答云 某甲有遲

○師云、莫妄想
 ○學答云 如何脫却
 ○學答云 煩惱即菩提有何障礙
 ○學答云 妄想裂破時作麼生
 ○師云、何早不道
 ○學答云 有我言語吾又失却
 ○學答云 道得事負話頭
 ○學答云 某甲無恁麼技倆
 ○師云、汝自何處出頭來
 ○學答云 不東西或南北
 ○學答云 無寸土處何問來處
 ○學答云 忘却來時路
 ○學答云 幸自和尚鼻孔裏來
 ○師云、可惜乎
 ○學答云 學人敗關一場
 ○學答云 謝師證明
 ○師云、作麼生道行脚眼
 ○學答云 十二時中不寄依一物

○學答云 雨中見紅日
 ○學答云 眉毛八字開
 ○學答云 日面佛月面佛
 ○學答云 道者不親
 ○師云、作麼道汝自己
 ○學答云 十二時中不離道箇
 ○學答云 如同死人
 ○學答云 依舊兩脚立地
 ○學答云 眼橫鼻直
 ○師云、三十年後
 ○學答云 恩大難酬
 ○學答云 三十年後如何保任
 ○學答云 學人不知歷日
 ○師云、好箇衲僧
 ○學答云 讚却似謗
 ○學答云 汗向背
 ○學答云 認奴莫爲郎
 ○學答云 任他謗任他非

○師云、好喝落處作麼生
 ○學答云 雨過夜塘秋水深
 ○學答云 湘南潭北
 ○學答云 盡大地一時振動
 ○師云、三十棒
 ○學答云 雖打不碎天邊月
 ○學答云 屈棒元來人無喫
 ○學答云 快哉快哉
 ○學答云 棒頭有眼
 ○師云、相見了也
 ○學答云 果然十萬八千
 ○學答云 當是隔五須彌
 ○學答云 大小老漢真弄鬼眼睛
 ○師云、汝作麼生
 ○學答云 掬水月在手弄花香滿衣
 ○學答云 一夜落花雨滿城流水香
 ○學答云 薰風自南來殿閣生微涼

○法問五十則

(學は學人、首は首座の時語、
第五句學人尊意の句を學し、
四句に引續ひて乞處を出す)

○學云 雪裡の梅花只一枝

○意云 寒苦の功に誇ること勿れ

○學云 中々祖室單傳の一枝で候ふ

○意云 咲や雪裡梅花只一枝と云ふは四時變更の一枝
を留めて祖室單傳の梅花と錯たず○乞處は見
よ根に和して推倒せり

○學云 正得推倒の時節に祖室の梅が開き申た

○意云 氣を追ひ香を尋ぬること勿れ

○學云 宗師も鼻孔を穿たる (珍重の萬歳の語は略す)

○意云 溪聲廣長舌山色清淨身

○學云 聲色を留ること勿れ

○意云 なか／＼聲色其儘が清淨身で候ふ

○學云 咲や溪聲……身と云ふは目前の境を留めて
清淨法身と錯たず○乞處は見よ却火洞然とし
て毫末盡く

○意云 正得うこで不變の山色が現れ申た

○學云 正得うこで不變の山色が現れ申た

○意云 正得うこで不變の山色が現れ申た

○學云 正得うこで不變の山色が現れ申た

○意云 正得うこで不變の山色が現れ申た

○學云 正得うこで不變の山色が現れ申た

○意云 正得うこで不變の山色が現れ申た

○意云 聲色外に威儀あることを知れ

○學云 ドチヲ。向ひても山は是れ山

○意云 十里の松門入て更に深し

○學云 頭を回して如何んと見よ

○意云 なか／＼。ドチヲ。向ひても別の風光は御座なひ

○學云 咲や十里……更深と云は漸く入れは漸く深き

○意云 ことを知ると雖も退歩承當の分無ひず○乞

○學云 處は見よ進むに門無く退くに路無し

○意云 正得進退路を絶したころ彌上松門の深きが知

○學云 正得進退路を絶したころ彌上松門の深きが知

○意云 正得進退路を絶したころ彌上松門の深きが知

○學云 退歩して如何んと見よ

○意云 宗師の入り來らんを待つ

○學云 實劍在手

○意云 放下着

○學云 なか／＼放下するや殺活自由

○意云 咲や實劍在手と云はたとひ吹毛の劍にもせよ

○學云 祖室門下には用不着○乞處は見よ空手還郷

○意云 正得空手還郷の鉢先は佛祖も敵し難し

○意云 汝手を切り足を切ること勿れ

○學云 宗師も御用心

○意云 常轉一如是經

○學云 是れ何の經卷ぞ

○意云 なか／＼佛祖傳來の如是經で候ふ

○學云 咲や常轉一如是經と云は二六時中自己の三昧

○意云 を留めて如是經と錯たず○乞處は見よ如來に

○學云 此經なし

○意云 正得夫れが一卷の如是經で候ふ

○學云 與麼ならば讀むこと一返せよ

○意云 宗師の口を閉却せんを待つ

○學云 獅子吼

○意云 哮吼せよ見ん

○學云 中々百獸も早く既に腦裂し申た

○意云 咲や獅子吼と云は野干鳴を作して獅子吼と錯

○學云 る己見邪解の漢だぞ○乞處は見よ一犬虚を吼

○意云 へて萬犬實を傳ふ

○學云 正得犬馬の聲に獅子吼の響が御座る

○意云 錯つて聞くこと勿れ

○學云 耳を掩ひ去らん

○意云 佛法大海漸入漸深

○學云 己見を以て深淺を計ること勿れ

○意云 なか／＼佛祖も計り難し

○學云 咲や佛法大海漸入漸深と云は向去一偈の

○意云 椀板漢にして退歩承當の分なし○乞處は見よ

○學云 一尺の水一丈の波

○意云 正得丈尺の定らぬが入る程深し大海で候ふ

○學云 脚跟實地を踏み來れ

○意云 限りの無ひが佛法の實地で御座る

○學云 無心常に白雲に伴つて坐す

○意云 光陰虚く度ること勿れ

○學云 中々油断は御座なひ

○意云 咲や無心常伴白雲一坐と云は山居獨處の日

○學云 送にして一乘聲聞の寔窟を出でず○乞處は見

○意云 よ驢車味ひ畢つて馬車到來

○學云 正得うれが無心の三昧で候ふ

① 首云 工夫を抛下し來れ
 抛下するや徹底無心
 ② 學云 一葉落天下知秋
 四時の變更に墮する事勿れ
 中々何國も同じ。秋色で候ふ
 ③ 首云 嗚や一葉落天下知秋と云は開花落葉を見て。本地の風光と錯た事よ○乞處は見よ歷劫湛然として無變色
 ④ 首云 正得變色なひが。天下の秋の。現成で候ふ
 ⑤ 首云 眼を拭つて如何んを見よ
 ⑥ 首云 舊に依つて。月白く風清し
 ⑦ 學云 慕直去
 ⑧ 首云 頭を回して如何んを見よ
 ⑨ 首云 中々向つた處に。二念は御座なひ
 ⑩ 首云 嗚や慕直去と云は。恁麼に去ることを解して。恁麼に來ることを。解せず○乞處は見よ。回頭なり回面なり
 ⑪ 首云 正得。回頭回面餘念が。あらばこり

① 首云 試に轉身一回し來れ
 宗師の後に隨はず
 ② 學云 四十九年の說法一時の夢
 夢を覺し來れ汝と相見せん
 中々覺すも一時の夢で候ふ
 ③ 首云 嗚や四十九年說法一時夢と云は如來の金言を慢つて自己の見解に誇たことよ○乞處は見よ諸法實相
 ④ 首云 正得諸法實相が如來の夢で御座る
 ⑤ 首云 寐語すること勿れ
 ⑥ 首云 宗師の夢を覺さん待つ
 ⑦ 學云 人人分上會つて虧かず
 汝が分上作麼生
 中々他の後に從はず
 ⑧ 首云 嗚や人人分上不會虧と云は頼りに己見に誇て生佛迷悟の隔あることを知らず○乞處は見よ漸漸修學悉當成佛
 ⑨ 首云 正得りの成佛も本來具足の姿で候ふ

① 首云 何に仍てか竹筵は長く看板は四角なる
 ② 首云 夫が夫夫の分上で候ふ
 ③ 學云 祖室の燈明萬古に傳ふ
 ④ 首云 吹き滅して如何んを見よ
 ⑤ 首云 中々吹滅するや萬古明明
 ⑥ 首云 嗚や祖室燈明傳萬古と云は佛祖單傳の道を知ると雖も吾宗本と傳に預らざることを。知らず○乞處は見よ此の門に入り來つて一燈を滅したり
 ⑦ 首云 正得滅した處で單傳の的意が顯れ申した
 ⑧ 首云 フット。吹き消しては。ナント
 ⑨ 首云 夫れで一段の光明が増し申た
 ⑩ 學云 道本と圓通
 ⑪ 首云 何に仍つてか道箇を餘す
 ⑫ 首云 中々特と調べて御勞せよ
 ⑬ 首云 嗚や道本圓通と云は無差別の見を留めて佛道の圓通と錯た事よ○乞處は見よ佛祖も不識
 ⑭ 首云 正得不識も圓通の消息で候ふ

① 首云 試に一線路を開け
 ② 首云 進歩退歩
 ③ 學云 一輪の明月禪心を照す
 ④ 首云 月影裡を出頭し來れ
 ⑤ 首云 中々出頭するや別地は御座ない
 ⑥ 首云 嗚や一輪明月照禪心と云は天邊の月を食り見て月下拂袖の分なし○乞處は見よ夜夜月は西に沈む
 ⑦ 首云 正得沈むも浮ぶも一輪の月で候ふ
 ⑧ 首云 光影を味却し來れ汝と相見せん
 ⑨ 首云 宗師の光影裏を出頭せんを待つ
 ⑩ 學云 鐵船水上に浮ぶ
 ⑪ 首云 奇怪の思をなすこと勿れ
 ⑫ 首云 中々乞處の的意と御勞せよ
 ⑬ 首云 嗚や鐵船浮水上と云は格別の力量を示すと雖も未だ正法の的意を知らず○乞處は見よ大海に滴水なし
 ⑭ 首云 正得りこが鐵船の浮び處で候ふ

① 首云 即今船何れの處にか有る
 去つて跡なし
 ② 首云 地に依つて倒れ地に依つて起つ
 大地無寸土何物か恁麼に起倒す
 ③ 首云 中々ごちらへ。倒れても大地は離れ申さん
 嘆や依り地倒依り地起と云は徒らに起倒の顛倒
 を見て。祖宗門下には。地も無く人も無きこと
 を。知らず〇乞處は見よ依り空倒依り空起
 ④ 首云 正得空が大地の全体で候ふ
 ⑤ 首云 即今何れの處に向つて起倒す
 ⑥ 首云 大地の上で寐たり起きたり轉んだり
 大地寸土無し
 ⑦ 首云 何に依てか兩脚立地
 ⑧ 首云 中々無寸土の處が稚子の立脚地で候ふ
 ⑨ 首云 嘆や大地無寸土と云は脱体空界を留めて祖
 門の行履と錯た事よ〇乞處は見よ大地厚さに
 三寸を増す
 ⑩ 首云 正得増減も無寸土の自由で候ふ

① 首云 無寸土の處如何んが脚眼を轉せん
 ② 首云 轉する處が無寸土で御座る
 ③ 首云 心外無別法
 ④ 首云 心を持ち來れ汝と相見せん
 ⑤ 首云 中々偏界會つて藏さずで候ふ
 ⑥ 首云 嘆や心外無別法と云は萬法は心の所現なるこ
 とを。知る事雖も心の一字も修行の障りな
 ることを。知らず〇乞處は見よ心を求むるに
 終に不可得
 ⑦ 首云 正得不可得が心の隠れ家で候ふ
 ⑧ 首云 與麼ならば目前に呈露せよ
 ⑨ 首云 呈すべきが。あらば早く心に事負せん
 ⑩ 首云 無心無心大無心
 ⑪ 首云 何者か恁麼に語話を爲す
 ⑫ 首云 中々語話其儘が無心で候ふ
 ⑬ 首云 嘆や無心無心大無心と云は空見外道の見解た
 り〇乞處は見よ以心傳心
 ⑭ 首云 正得うれが徹底無心の單傳で候ふ

① 首云 斷無の見を爲すこと勿れ
 ② 首云 無心單傳に斷無の沙汰は御座ない
 ③ 首云 大地一偏の雪
 ④ 首云 一色邊に迷ふこと勿れ
 ⑤ 首云 中々。トチラ。向ひても白漫漫地で候ふ
 ⑥ 首云 嘆や大地一偏雪と云は一色那邊に向つて行履
 し去つて回頭回面の力量なし〇乞處は見よ雪
 消へて山骨露る
 ⑦ 首云 正得其の山骨も雪中の詠めで御座る
 ⑧ 首云 孤峰何に依つて不白なる
 ⑨ 首云 不白も雪に依つて顯れ申た
 ⑩ 首云 一二三四五六七
 ⑪ 首云 數量に墮すること莫れ
 ⑫ 首云 中々佛祖も數へ盡さず
 ⑬ 首云 嘆や一二三四五六七と云は猥りに算數に涉つ
 て祖門の的意を誤つた事よ〇乞處は見よ無二亦
 無三
 ⑭ 首云 正得。無二亦無三が佛祖の數量で候ふ

① 首云 本來無一物と云はば
 ② 首云 無一物が無盡藏で御座る
 ③ 首云 紅粉を塗らす轉た風流
 ④ 首云 是れ何人の面目ぞ
 ⑤ 首云 中々。佛祖も知らぬ一人で候ふ
 ⑥ 首云 嘆や。不塗紅粉轉風流と云は自己の奥面皮
 を認めて佛祖の眞面目と錯た事よ〇乞處は見
 よ粉骨碎身
 ⑦ 首云 正得。夫で風流の姿が顯れ申た
 ⑧ 首云 心身脱落し來れ
 ⑨ 首云 脱落するや眞の面目
 ⑩ 首云 偏界不藏空索索
 ⑪ 首云 空見に墮すること勿れ
 ⑫ 首云 中々。元來一物の留むべきは御座ない
 ⑬ 首云 嘆や。偏界不藏空索索と云は。空空寂寂を留め
 て吾宗の行履と錯た事よ〇乞處は見よ有花
 有月有樓臺
 ⑭ 首云 正得。其現成が空索索の全体で候ふ

① 尊云 恁麼の見を放擲せよ
 ② 尊云 放擲するや空索索
 ③ 尊云 大地に飢人無し
 ④ 尊云 何人が恁麼に足ることを知る
 ⑤ 尊云 中々一切衆生皆な其人御座る
 ⑥ 尊云 嗟や大地無飢人と云は有情非情同時成道なることを知ると雖も迷中又迷の漢あることを知す○乞處は見よ鬼窟に活計を爲す
 ⑦ 尊云 正得其餓鬼も畜生も本來成佛の其人候ふ
 ⑧ 尊云 何に依てか飢來れば飯を喫す
 ⑨ 尊云 喫して大地に飢人は御座なし
 ⑩ 尊云 入ては幽玄の底に徹し出ては三味の門に遊ぶ
 ⑪ 尊云 猥りに伎倆を費すこと勿れ
 ⑫ 尊云 中々佛祖超越の遊戯三昧で候ふ
 ⑬ 尊云 嗟や入徹幽玄底出遊三昧門と云は佛邊祖邊の閑遊戯を樂んで格外超越の力量なし
 ⑭ 尊云 ○乞處は見よ出入去來畢竟空
 ⑮ 尊云 正得夫が三味の門で御座る

① 尊云 尙云も三昧を捨て兼たは奇特玄妙の妄見たり
 ② 尊云 ○前句は見よ眼を開いて當眼の境なし
 ③ 尊云 正得一境の見る可きなきが徹底幽玄の詠めで候ふ
 ④ 尊云 頭を回して如何んと見よ
 ⑤ 尊云 向ふ處が三味の門で御座る
 ⑥ 尊云 月は天に有り今水は瓶に有り
 ⑦ 尊云 自然見に墮すること勿れ
 ⑧ 尊云 中々諸法住法位の詠めで候ふ
 ⑨ 尊云 嗟や月在天今水在瓶と云は有爲の前境を認めて無爲の實相と錯た事よ○乞處は見よ賤が女の戴く桶の底ぬけて水たまらねば月も宿らず
 ⑩ 尊云 正得宿らぬ月はかくれ家も御座無ひ
 ⑪ 尊云 尙云も月に眼を看たは眼花を留めたり○前句は見よ天地撲落
 ⑫ 尊云 道理で月光に障りはた座ない
 ⑬ 尊云 月影裡を出頭し來れ
 ⑭ 尊云 出頭するや月天に在り

① 尊云 青天白日
 ② 尊云 眼を開いて如何んと見よ
 ③ 尊云 中々活眼の人に見餘りは御座らん
 ④ 尊云 嗟や青天白日と云は明白裡を珍重して吾宗は日午に三更を打することを知らず○乞處は見よ天曉不露
 ⑤ 尊云 正得從來隱さぬ青天に顯す可きが有らばこ
 ⑥ 尊云 尙云も一偏見にし去つて隠顯自由の分なし
 ⑦ 尊云 ○前句は見よ昨夜三更午を失却す
 ⑧ 尊云 正得失却してこり一點の曇りは御座なし
 ⑨ 尊云 何に仍てか恁麼に寐語を爲す
 ⑩ 尊云 宗師の睡眠を覺さん待つ
 ⑪ 尊云 高ふして上無く廣ふして涯り無し
 ⑫ 尊云 頭を回して如何んと見よ
 ⑬ 尊云 中々何處向ひても涯りは御座無ひ
 ⑭ 尊云 嗟や高無上廣無涯と云は亂に廣博を認め
 ⑮ 尊云 て祖門の的意と錯たず○乞處は見よ三間の茅屋從來住す

① 尊云 正得其茅屋に乾坤の廣さが御座る
 ② 尊云 尙云も廣狹を論じたは佛土の邊量を知ん
 ③ 尊云 ○前句は見よ細には無間に入り大には方
 ④ 尊云 所を絶す
 ⑤ 尊云 正得恁麼の自由に縦も涯が有らばこ
 ⑥ 尊云 其の見解を脱落し來れ
 ⑦ 尊云 脱落の折柄に案窟がこれ申した
 ⑧ 尊云 天上人間獨尊と稱す
 ⑨ 尊云 尊貴に誇ること勿れ
 ⑩ 尊云 中々餘人の及ばぬ獨尊佛で候ふ
 ⑪ 尊云 嗟や天上人間稱獨尊と云は自ら尊大の氣を
 ⑫ 尊云 逞ふして鼻孔を漫天にうらす初心新入の見
 ⑬ 尊云 解たり○乞處は見よ盧行者昔日確房に入る
 ⑭ 尊云 正得確房に入た盧行者は黃梅七百の衆中
 ⑮ 尊云 に獨尊と稱し申した
 ⑯ 尊云 尙云も自を慢じ他を瞞するの漢○前句は見
 ⑰ 尊云 よ朝三暮四
 ⑱ 尊云 正得朝三暮四に獨尊の機鋒が御座る

① 己見に跨るの漢。頂上より三十棒
 ② 棒下に人あらば。兩個とならん
 ③ 七佛已前に。血脈を通す
 ④ 將錯就錯なること勿れ
 ⑤ 中々。錯不錯の沙汰は。御無用
 ⑥ 咳や。七佛已前通血脈と云は。空劫已前の消
 息を知ると。雖も。面面授の。正傳あることを。知
 らず。〇乞處は見よ。靈山拈華して。迦葉に傳ふ
 ⑦ 正得。其單傳が。七佛已前の。血脈で候ふ
 ⑧ 尚云も。血脈に。眼を着たは。一物を留たず。〇
 前句は見よ。拈華の手に。傳へ物は無ひ
 ⑨ 正得。其處で。佛祖の。正脈が。通じ申した
 ⑩ 何物が。恁麼に通す
 ⑪ 宗師も其人で御座る
 ⑫ 釋迦彌勒は是れ兒孫
 ⑬ 恁麼の見解を。抛却し來れ
 ⑭ 中々。放下して。ころ。向上の那人と成り申した
 ⑮ 咳や。釋迦彌勒是兒孫と云は。法身上に坐着

して上來菩提の。精進を欠く。〇乞處は見よ。東
 家には奴と成り。西家には。婢と成る
 ① 正得。其奴兒婢兒に。佛祖向上の。機用が御座る
 ② 尚云も。尊貴を捨て棄たは。佛見法見の。真氣が。
 殘つた。〇前句は見よ。本是眞璧の。平四郎
 ③ 正得。向上の。那一人。何んとなりとも。名は附
 け次第に候ふ
 ④ 子孫邊の事を。見る。こと勿れ
 ⑤ 向上の。那一人。如何でか他の。後へに。隨はんや
 ⑥ 家破れ人亡ふじて。何れの處にか歸る
 ⑦ 親父の家郷を。忘る。こと勿れ
 ⑧ 中々。歸處の無ひのが。乞處の。的意で候ふ
 ⑨ 咳や。家破人亡何處歸と云は。俗傳。旅泊の。客作
 兒たり。〇乞處は見よ。三界を以て。屋宅となす
 ⑩ 正得。其の。屋宅には。柱も。壁も。御座無ひ
 ⑪ 尚云も。空空たる。偏界を。住家となすは。安心
 立命の。地に。あらず。〇前句は見よ。到る處無
 心なれば。便ち。是れ我が家

① 正得。無心の家は。四方の柱もなしで候ふ
 ② 住着せば不可
 ③ 住着すべき家が。破れ申した
 ④ 性海風無ふして。寶鑑明かなり
 ⑤ 死窟窟を。守る。こと勿れ
 ⑥ 中々。風波の。たぐぬが。乞處の。活水で候ふ
 ⑦ 咳や。性海無風寶鑑明と云は。死水裡に。没溺
 するの。漢にして。吾宗の。活消息なし。〇乞處は
 見よ。里廬海上。波瀾を。起す
 ⑧ 正得。起した。波瀾が。本來。清淨の。活水で候ふ
 ⑨ 尚云も。寶鑑明白の。死水を。留む。〇前句は。見
 よ。東瀛。西没
 ⑩ 正得。其自受用が。寶鑑不昧の。折柄で候ふ
 ⑪ 轉身一回し來れ
 ⑫ 轉々自由が。寶鑑三昧
 ⑬ 寒澆打碎く。蒼涯の。月
 ⑭ 月光何れの處にか在る
 ⑮ 中々。何處も。彼處も。障は。御座無ひ

① 咳や。寒澆打碎蒼涯月と云は。水中。動搖の。影
 を。弄ふして。打てとも。碎けぬ。心月ある。こと
 を。知らず。〇乞處は見よ。珊瑚。枝上。掌看の。月
 ② 正得。珊瑚。枝上に。鮮かなは。碎けた。月の。片片
 で候ふ
 ③ 尚云も。孤圓の。心月に。瑕を生ず。〇前句は。見よ。
 圓かなること。大虚の。如くにして。欠くる。こと
 なく。餘ることなし
 ④ 正得。無欠。無餘の。光明が。碎けた。月の。七八片
 で候ふ
 ⑤ 道ひ得ざるに。非ず。漸く。八成を。道ひ得たり
 ⑥ 某甲。舌頭。短し
 ⑦ 安眠。高臥。青山に。對す
 ⑧ 無漸。無愧にし。去ること。勿れ
 ⑨ 中々。佛事。門中に。暇間ひて。安眠。高臥の。日送
 りで候ふ
 ⑩ 咳や。安眠。高臥。對。青山と云は。佛邊。祖邊を。超
 過する。と雖も。爲人。度生の。慈悲。心を。欠く。

○乞處は見上幾度か上床幾度か下床
正得。其勢れた。下休みに。前後忘却の安眠で
候ふ

④ 旨云 尚云も。瞞肝郎當少からず○前句は見よ。枕上
更に。閑夢の安きなし。

④ 旨云 其筈無夢無想の。一睡で候ふ
洗面一回し來れ

④ 旨云 宗師に茶を献せん
昔日靈山の正法眼

④ 旨云 瞎却し來れ。汝と相見せん
中々。既に瞎却の正眼で候ふ

④ 旨云 咳や。昔日靈山正法眼と云は。鬼眼睛を留めて
佛祖の眼目と。錯たず○乞處は見よ。瞎邊に
向て。滅却す

④ 旨云 正得。滅却したる正法眼は。昔も今も明歷々
尙云も。錯て註却を爲す○前句は見よ。佛見
を脱落す

④ 旨云 正得。脱落したが。正法の眼目で候ふ
何人が單傳し來る

④ 旨云 此人を求るに。終に不可得
虚空に形無し

④ 旨云 何を呼でか。虚空を爲す
中々。喚で名くべきなきが。空虚で御座る。

④ 旨云 咳や。虚空無形と云は。外道の頑空を認めて。
祖門の虚空と錯たず○乞處は見よ。日月星辰
露堂々

④ 旨云 正得。それが虚空の全体で候ふ
尙云も。一枚の虚空を。識得すると雖も。色
即是空なることを知らず○前句は見よ。山は
是山。水は是水

④ 旨云 正得。恁麼の現成が。徹底空の跡めで候ふ
眼花すること勿れ

④ 旨云 今日宗師と虚空を論ず
聯芳續焰今に到て傳ふ

④ 旨云 錯て傳來すること勿れ
中々。會て錯らぬ。今古傳來の祖燈で候ふ

④ 旨云 咳や。聯芳續焰到今傳と云は。單傳附屬を尊
んて。將錯就錯なることを知らず○乞處

は見よ。龍潭會て吹滅す

④ 旨云 正得。夫れで佛祖單傳の。的意が顯れ申した
尙云も。未だ脱洒ならず○前句は見よ。千聖不傳

④ 旨云 正得。不傳の燈明は。今古聯綿で候ふ
恁麼に流布に。墮在せば。吾宗を滅却すること。
あらん

④ 旨云 不傳の燈に滅不滅の。沙汰は御座無ひ
無限の靈光大千に輝く

④ 旨云 昧却し來れ汝と。商量せん
中々。昧却することの。出來ぬ大千一枚の靈光
で候ふ

④ 旨云 咳や。無限靈光輝大千と云は。全身光明に入
て。光影裡出頭に分なし○乞處は見よ。黒漆昆
崙夜裏に走る

④ 旨云 正得。暗夜が昆崙通身の。光明で候ふ
尙云も。未だ舊見を捨てず○前句は見よ。法身
二種の光を透脱す

④ 旨云 正得。其時眞箇の靈光が。顯れ申した

④ 旨云 何に仍てか。道箇を照さるる

④ 旨云 宗師の手本が。光明で御座る
森羅萬象輝耀に任す

④ 旨云 平地に喫喫すること勿れ
中々。今古不變の。風光で候ふ

④ 旨云 咳や。森羅萬象任輝耀と云は。平地に凸凹を
見て。眞箇の風光と錯るの漢○乞處は見よ。一
塵を立せず國家喪亡

④ 旨云 正得。一塵も無ひが。森羅萬象の現成で候ふ
尙云も。空華を見て。眞實と錯る○前句は見よ。
天地崩壊

④ 旨云 正得崩壊してころ。森羅萬象に障は御座無ひ
常見に墮すること勿れ

④ 旨云 本際解脫の風光に。斷常の沙汰は御無用
無眼耳鼻舌身意

④ 旨云 何者か恁麼に。語話を爲す
中々。無舌人の。語話で候ふ

④ 旨云 咳や。無眼耳鼻舌身意と云は。心身脱落するど

雖も脱落心身。あることを。知らず○乞處は見よ。眼横鼻直

○云 正得。其面目に影象の留むべきが。あらばこゝ向云も。舊時の真面目を留めて。祖門の真面目と錯る○前句は見よ。六根終日前境に對す

○云 正得。對其の儘影象は。御座無し

○云 何に仍てか。摸索不着

○云 宗師も鼻孔なし

○學云 大用現前規則無し

○云 意氣に誇ること勿れ

○云 中々。誇らざれども。自然で候ふ

○云 映や。大用現前無規則と云は。己見に誇つて。回光返照の分なし○乞處は見よ。心の欲する所に。從つて矩を踏へず

○云 正得。其善元來無規則の自由で候ふ

○云 向云も。舊時の己見を脱せず○前句は見よ。水は方圓の器に隨ふ

○云 正得。方圓自在の現成に。縊も規則が有はこゝ

○云 其機を脱し來れ

○云 轉々自由

○學云 明明觸處露堂堂

○云 眼睛を拭つて子細に見よ

○云 中々。徹底觀しひ現成で候ふ

○云 映や。明明觸處露堂堂と云は。徧界現の影象を認めて。本來の面目と錯るの漢○乞處は見よ。玉簾深く垂れて。顔を露さず

○云 正得。窺ひ難ひが。露堂々の的意で候ふ

○云 向云も。病眼轉動を脱れず○前句は見よ。佛祖も眼を着け難し

○云 其處に味し難ひ。消息が御座る

○云 何に仍てか。遠箇を照さるる

○云 照さば却て。露堂々にあらず

○學云 歴歴分明珠盤に走る

○云 他の點檢に著ること勿れ

○云 中々。他の點檢に預らぬ。一顆の明珠で候ふ

○云 映や。歴歴分明珠走盤と云は。亂に魚目を留め

て。明珠と錯るの見解たり○乞處は見よ。打破打破の打柄。真箇の靈光が顯れ申した

○云 向云も。一物を珍重す○前句は見よ。手中の珠を失却す

○云 正得。得失ともに。珠の轉變で候ふ

○云 自己の家珍を以て。他の爲に。拈弄すること勿れ

○云 宗師の兩手を。展開せんを待つ

○學云 天真にして。妙なり迷悟に屬せず

○云 何者が恁麼に奇怪なる

○云 中々。元來名相に染ます

○云 映や。天真而妙不屬迷悟と云は。那邊に一物を留めて。天真佛と錯た事よ○乞處は見よ。驢胎に入り。馬腹に入る

○云 正得。何と成ても。迷悟に染まぬ。眞實が御座る

○云 向云も。迷悟に涉らざるは。自然見の外道たり

○前句は見よ。久遠實成の佛も。一見明星悟道す

○云 正得。其悟道で天真佛が。顯れ申した

○云 他の後へに。從ふこと勿れ

○云 凡聖迷悟。なければ。從ふべきは。御座無ひ

○學云 明月に露を藏す

○云 異類を辨じ來れ

○云 中々。異辨の眼が御座る

○云 映や。明月藏露と云は。類して齊らざる事を。知と雖も。脱体现成。なることを。知らず○乞處は見よ。徧界會て藏さず

○云 正得。藏されば顯すべきは御座無ひ

○云 向云も。本來の面目。露堂々。なることを知らず○前句は見よ。隠せば彌上顯る

○云 彌上顯れた姿。佛眼でも見入申さぬ

○云 恁麼生か道へ。同中異辨の眼

○云 同異に拘らぬが。吾宗の本意で御座る

○學云 柳は緑り花は紅ひ

○云 先づ屋上に霜を見よ

○云 中々。霜雪に拘らぬ詠めで候ふ

○首云 嗚や。柳緑花紅と云は。今時に詠をこらして。

本地の風光は夢にだも知らず○乞處は見よ。木凋み葉落つ

○首云 正得。其處で不變の春色が。顯れ申した

○首云 尙云も。春色を弄ぶは。從來の凡情たり○

前句は見よ。いつこも同し秋の夕暮

○首云 正得。元より四時變更に。拘らざる詠めで候ふ

○首云 眼花すること勿れ

○首云 宗師の春色を弄せんを待つ

○首云 當面に送過すること莫れ

○學云 本來無一物

○首云 何に仍てか有花有月有樓臺

○首云 中々。現成其儘の説破で候ふ

○首云 嗚や。本來無一物と云は。六祖の言句に迷ふて

空空大空畢竟空の。見に墮す○乞處は見よ。

十方世界に。全身を現す

○首云 正得。其現成に一物の。留むべきは。御座無ひ

○首云 尙云も。先尼外道の。保社を免れず○前句は見

よ柳緑花紅

○首云 正得。花や柳が無一物の。種々で候ふ

○首云 道箇の竹篔何に仍てか。長きこと三尺

○首云 宗師の放下せんを待つ

○首云 宗師法王法。法王法如是

○首云 三界無法何を呼んでか。法王法と爲す

○首云 中々。今古不斷の如是法で候ふ

○首云 嗚や。諦觀法王法法王法如是と云は。轉大法輪

の。死寢窟に。墮在して直下に見破する底の。

轉機なし○乞處は見よ。法の本法本と無法

○首云 正得。無法が如是法の本意で候ふ

○首云 尙云も。舊見を脱し兼ねて。洒洒落落の力量な

し○前句は見よ。四十九年。一字不説

○首云 正得。如是法三字の。説くべきが。あらばい

○首云 如是法に。説く可きなし。何を呼んでか。法王

法と爲す

○首云 説くべき。なきが。法王法の。本體で御座る

◎ 諸 作 例

○ 拈竹篔と謝語

拈竹篔。葛陂化龍杖。陶家居盤梭。潜縮也得運轉也
得。拗折而爲二兩段。早是涉背觸。強論長短却爲
戲具了。可中有知變態底。試不爲戲具不涉背
觸。開口閣梨放過一著來。

謝語。進退下山鬼。鈍逼止瀨魚。頼他放空罽。使
我脱樵漁。

拈竹篔。天象如陣雲。量不過三尺。變化雖無方。

用唯在手裏。首山爲魁。妙喜爲殿。他早是被背觸

了矣。滿堂鐵額漢子。不蹈前蹤。速請活句商量來。

謝語。放開捏就。啐啄同時。奉命不讓。臨機出

師。弓折箭盡。無地敗馳。掛肝樹上。脱累卵危。

漸紅滿面。一任衆嗤。

拈竹篔。一莖草丈六身。拈來物物親。松柏樹下。莓苔
石上。無處不好伽藍。況亦。萬岳千山雙不借。輕風

細雨一夫頂到處一蒲團上。如人要建立。一任他建立。

開口子。隨意試一著來。

謝語。不見道。古曰。截鶴長而不離鴨短。世
法裏雖有佛法。豈佛法理有世法。滿堂盡是學佛尊
者。抱是佛慈。而恕之則幸甚。何故。寸長尺短二三
六。分附清霄夢一場。

拈竹篔。神官見之謂之神。儒師見之謂之儒。云儒
云神也不妨。若識琴中趣。易弄絃上聲。況關東而
薩摩菊。鎮西之江戶菊。有時同放一般花。從來無二
亦無三。勿言一乘法。第一開口子。不管開花落葉
之聲色。先放本來香一來。

謝語。松竹雄豪歲寒見。風刀殺氣奈躬屏。欲藏彌
露霜林愧。紅葉特看加報額。

○ 賀 偈

賀大眉首座

八字眉開膽腑大。天生英物世無倫。豈誇一句超然語。
處首御衆忘主賓。

賀泰麟首座

及弟心空却借功。吐雲吞海逞英雄。好看胡越同身意。持已保人津渡通。

賀吞牛首座

知恩誰克解酬恩。無角泥牛出海門。月渚煙波都踏破。五湖凡聖一齊吞。

賀道吟首座

枯木龍吟道已成。彌饒眼活自圓明。西江及纜飽參客。肚腹解開徹底清。

賀頌乘首座

行脚事休功顯位。烏藤拗折較些々。海山雲雨已消盡。夜月曉風對舊家。

賀鐵心首座

鐵石心操壓滿堂。平生道行異尋常。無門關鎖明通達。笑據空前未兆床。

賀全峰首座

道心常慕祖師蹤。實行能通古佛宗。正領永平那半座。全機獨露吉祥峰。

賀古禪首座

得法精神似石堅。至高願行絕齊肩。今冬當領半筵座。提唱單傳古佛禪。

賀偈二首

欲了宗風八刻運。分明認得一雙眉。吉祥峰上拂塵去。露出娘生舊面皮。

其二

行脚東西二十年。吉祥山裡學真禪。堂中已具人天眼。無限靈光照半筵。

○轉衣法語

永平瑞世法語

山門

鐵々關鎖。重々門關。與白雲共來往。高如乾廣似坤。

佛殿

麻三斤後。乾屎橛前。畢竟什麼賣弄。新婦騎驢阿姑牽。

土地神

洞上難窺。王老易視。日八兩日八斤。江南橋江北枳。

吾是方外一王臣。

承陽殿

傳東佛性唱真禪。攪破滿天長夜眠。吉祥峰上松杉老。影暗六百五十年。

總持瑞世法語

山門

親參坐破。娘生舊時之顏。壽直透得。曹洞第一之關。

佛殿

迷則是黃金佛。悟則即自己心。心佛向何處拜。能山高幽谷深。

祝聖

皇威赫々。直振四邊。聰明察々。能照一天。

兩尊

櫛比之山。酒井之水。山水天下絕無。奇景永樂兒孫。

拈衣

一肩鹿布。唯足藏醜。纒論授傳。金毛成狗。

山門

祖堂

守口少室。學歌大倭。被喚南天太子。如日本乞食。何祝聖。

祝聖

騎鶴纏腰十萬貫。揚州富貴望漫々。峨洋獻壽山兼水。奏得陽春一曲彈。

承陽殿

空手面目。脫落身心。春顯花秋隱月。令風流長古今。

同

山門

家庭嚴峻。不許禪魔徘徊。鎖鑰放開。豈妨新佛入來。

佛殿

金泥木鑿。端坐形相如人。唯心幻影。千山紅葉似春。

土地神

安置真神。永祈佛天加護。至慈照鑑。此不到紫陌塵。

祖堂

雪中合眉。門內翁門外兒。西天東地。遺法如布奕基。

祝聖

聖明照臨水穗國。謳歌欽舞億兆民。正祝萬歲萬々歲。

新條日月。特地乾坤。鴻扇八字。開總持門。

佛殿

好箇佛殿。可惜有佛。蓋天放光。速還小卒。

祝聖

一天舜日。高掛扶桑。蕩蕩行澤。施及漢洋。

兩尊

有此師則。亦有斯兒。磁鐵心契。膽之仰之。

拈衣

唯此一肩。非長非短。佛祖不知。禦寒功重。

○賀轉衣偈

賀天桂禪人轉衣 尾上人

天桂子乎天桂子。金城尤物實參人。而今彰顯艱難德。

高祖真前現錦身。

賀大耕禪人轉衣

大道修來行自親。耕耘心地現天真。祖園開展華衣錦。

古佛家風從斯新。

賀孝道禪友轉衣

精勤實己願心高。誠實為他不辭勞。衰命轉衣非莫故。

五更猶坐避喧囂。

賀達心禪人轉衣

達道通心誰佛道。心中那落絕疑根。轉衣今後孜孜力。

回復真禪報祖恩。

賀鐵舟禪人轉衣 玄法和尚開悟悟由

玄法一兒有悟由。慧敏奇骨不常流。轉衣今後與賢顯。

苦海欲浮大鐵舟。

○晉山法語

松林寺晉山

山門。現成門戶。八字打開。如要人出。試逐吾來。

佛殿。不妨恭禮。豈費思量。若無鏡量。箇箇放光。

伽藍。有靈而應。有感而通。神光不昧。影像隨躬。

祖堂。西天達賊。東土報冤。至今未了。累及兒孫。

開祖。曾垂隻手。幾費思量。亘今亘古。只在蔭涼。

據室。家風常演。說默韻高。晨昏一任。聽作松濤。

光正山照空寺晉山

山門 光正雖關。彈指放開。若要入得。隨逐我來。

佛殿 鐘作鐘韻。鼓作鼓聲。燒香三禮。現身度生。

伽藍 護法安人。全在方寸。共主車行。一推一挽。

祖堂 西天東土。唯箇一人。無能禮主。無所禮賓。

開山 逢寒遇熱。在護後昆。曾掃菴脚。廣大深恩。

據室 魚躍淨水。鳥飛戾天。勿怪野衲。飢冷困眠。

日東山正法寺晉山 本尊十一面觀音。開山草創與傳法二師

山門 日東山裡。道有鐵關。開通時久。何妨往還。

佛殿 圓通說法。何限南州。應現自在。月泛清流。

伽藍 正見邪見。爭論日生。非君神力。誰平不平。

祖堂 西來東去。都無脚痕。河頭賣水。殃及兒孫。

開山 一輪明月。高照別峰。吞却吐却。圓光最濃。

據室 何識維摩老。元來正法床。現成公案底。坐臥

兩想忘。

篆視 佛祖寶印。篆文雜精。風吹日炙。歷歷明明。

晉山上堂法語

山門 聞聲見色。解脫正門。若要投入。隨我脚跟。

佛殿 一莖艸上。丈六金身。親者不道。道者不親。

六三

謝語 為法忘躬。鳴榔驗證。醉詞巨響。恩厚有剩。

次惟 諸山耆德。同門宗匠。山門兩序。四來弟兄。

記得梁山緣觀禪師曰。南來者三十棒。北來者三十棒。

雖然如是。未當向上宗乘中事。見來梁山只要塌地不求

天。有人若要知向上宗乘麼。且白矮子看戲。伏以素慈

垂語 現成公案許汝三十棒。這裡還有知痛痒底麼。

試抽身來。(問答)

此香。香氣全無。不當分文。人前不免投向金爐。奉酬

本師何某大和尚法乳之深恩。伏冀。道風永扇。法輪長

轉。

伽藍 理無曲斷。車不橫推。終日竟夜。保護在茲。

祖堂 探竿在手。影草隨身。機輪輪轉。轉大法輪。

開山 種栽盡力。一樹甘棠。春風秋雨。幾幾蔭涼。

據室 太平好賊。清世遊民。智者云智。仁者云仁。

此一瓣香。嚴重拈得。燕向寶爐。端為祝延。今上皇帝

聖壽萬歲萬歲萬萬歲。仰希陛下。萬邦沾聖德。四海仰

仁風。

久立珍重。

日東山正法寺晉山上堂

山門

放開關鑰。何妨即通。真佛直入。將起家風。

佛殿

汝是舊在佛。吾則新來佛。新舊正交參。唯應機接物。

伽藍

辨別是非。不用寬許。賞罰分明。請莫顛語。武帝不契。漫驚大唐百家。神光得髓。能斷宗綱亂麻。

祖堂

兩箇癡漢。七頭八倒。實令兒孫。寒煩熱惱。安眠意自閑。高臥是仙客。頭達非吾願。茅廬月一環。

開山

千古萬古。永證明歷之信。不朽不滅。正法無字之印。

視象

唯我獨尊。往來總無罣礙。毘盧頂顛。壽過在吾脚跟。

登須彌

此香呼道日本魂。挫強扶弱義氣。當任未辭死。恭燒金爐。端為祝延。今上皇帝壽萬歲萬歲萬萬歲。陛下欽願。文德廣施。武威宜振。

祝聖

四海普運奉國憲律法。八蠻齊沐浴撫育恩惠。此一瓣香。二十有年。東去西來。看破幾叢林。諦觀自己心。恭投爐中。供養。三國傳東歷代祖師。高祖。太祖。當寺草創開山。傳法始祖。歷住諸大和尚。奉酬法乳大慈恩。仰冀。燈燈續焰。永不斷絕。子孫得力。宗風永扇。

祖師

此香。占居矮屋中。無欲傲王公。對月談玄妙。觀花說色空。茲掃香爐。以薰破親教授業師。當山開居老和尚鼻孔。聊答毒棒熱喝洪恩。伏願。道骨堅於金剛。慈心深似九淵。

嗣承香

眼光如鑠電。大喝似奔雷。直入壽頭打。佛來又祖來。(問答)

授業師

文化日進千事新。開明月步萬物珍。學藝立奇泣鬼神。技術巧妙奪天真。正當怎麼時如何處

索語

又祖來。(問答)

提綱

曰。佛元來非佛。衆生元來非衆生。離衆生無佛。離佛無衆生。故衆生元無可看。無可習禪。又何要成佛作祖去。兩老漢未脫頭上案頭泥裏。洗土塊哉。得法要旨。唯有這顛倒妄想。忘却船筏。昨夢。不見道也。胃來清淨法身。毘盧遍那佛。疑去。千生萬劫六道。彷彿人。嗎。心佛及衆生。是三無差別。

謝語

恭惟本山現董無翼庵老古佛。晦德韶光。屈尊枉臨此席。親舉金鎚。獅吼證明。恩大難酬。感謝何得盡言詮。

自序

即通道人。乳臭未除。乾屎未去。當任難辭。亂襲師席。諸大德請願憫道人不敏。下是所證明。不是所穿却之鐵鎚。

拈則

次惟遠近大利老耆宿。降峰宗匠。山門兩序。四來雲衲。都為法忘身。或補缺助短。或百奔千走。使道人現此身。噫。恩高如山。他日如何報。記得。王敬常侍。一日。與臨濟。至僧堂。乃問道。一堂僧。看經也。濟云。不看經。侍云。習禪也。濟云。不習禪。侍云。不看經。不習禪。畢竟作什麼。濟云。總效彼成佛作祖去。侍云。金屑雖貴。落眼成翳。如何。濟云。我將謂汝是箇俗漢。山僧今日拈此公案。

○賀住山轉住偈

賀桂堂和尚住祥雲

由來清白舊家風。不墮今時道益崇。明月堂前移步處。桂香暗發滿禪叢。

賀白風和尚喬遷龍雲

風宿龍巢德感時。道交方識接麟龜。清風八面祥雲裏。退步且觀欠瓦規。

賀法眼和尚住圓滿寺

克通宗意獨推公。圓滿行持能現功。正法眼藏將坐斷。令人千古仰家風。

賀德林和尚住山寺善發院徒
善養道心德壓班。常持淨戒行無間。老禪南面拈毛拂。
恰似釋迦出雪山。

賀泰順和尚住菊仙院清涼寺徒
剃髮染衣拋利名。胸襟洒落自清涼。春蘭秋菊仙家樂。
物外超然養道情。

賀正泉寺愚道和尚榮轉常聲寺
侃諤多年唱祖風。尋常聲譽德望隆。應請此歲遊南海。
宗說般般短艇中。

賀通安寺宜仙和尚榮轉萬福寺
精勤孜孜嘗苦酸。七通八達自平安。千均宗鼎擔當節。
萬福無窮珠走盤。

○祝疏

請環溪和尚住大溪山豪德寺疏代山門兩序坦山和尚
大溪潺湲。遠傳碎玉之浪。豪德赫々。遙吞富嶽之高。
東海叢席獨恣名。天下巨筮多避盛。恭惟環溪禪師。
法門甘露。宇內至珍。機儀峻嚴早挽回先天之力。禪源

深密。已榮復老桂之魂。名實不曾少欠。人境宜相適稱。
乾坤覆與載。萬物共長成。今古各又休。一時須旋復。
伏請。速拈曇華之拂。切照仰景之心。

遠州濱松普濟寺開堂門葉疏三和尙代達爾和尚作
海東法窟。寒巖枯木道場。遠陽名藍。華藏掃草勝地。
鼎革循環輪重之舊格。同去虛文。確定選拔特住之新條。
要就實理。苟非敦請作家宗匠。焉能播揚開祖香風。

常得其人。不誤此道。恭惟。名入大和尚。胸宇豁達。風
裁軒昂。廣澤自由。客來點茶何問細素。普濟通義。因
則打睡豈論曉昏。其潔已也。濱松萬籟風濤拂拭煩熱。
厥爲人也。天龍一河波浪洗清耳根。不妨堅立利竿。正
好策進龍象。適會皇政維新之運。則得此時。願當禪風
復古之仁。更俟何日。闔門只待。宗說貫通提撕。舉國
將聞。政教一致宣演。伏希。轉法王無上法輪。祝人皇
龍圖悠久。

請橘仙禪師住瑞龍道舊疏奏堂禪師
北陸道越中國高岡山瑞龍寺偶關主。大檀越菅原賢候
敦請洞泉橘仙禪師。設席爲國開堂演法。聽其德音雖不

寂算愈增加。人民齊仰清平之舜德。三國傳經祖師或謂承香
等任三住持人所欽一
釣語。第一義諦。顯面分明。舉動施爲。烏道無殊。
坐臥經行。無非玄路。此中有會底漢出來通消息看。
提綱。一乾坤大圓覺。盡法界一箇身。情與有情方解
護生。護生也心心不妄動。禁足也步步不妄移。所以道
森羅萬象古佛家風。碧落青霄道人活計。先佛於是常轉
法輪。後佛於是又建法輪。還要委悉否。若是不設心地
本來空。爭安居平等性智。

謝語。恭以。黃龍函丈。爲法忘身。祖肩助化。鳴鶴證法。
謝悃難伸。一次惟。降峰列刹。耆宿。同門末山宗匠。山門兩
序。一會四來麟鳳龜龍。扶吾蚊力負此法材。恩願幾多。謝
詞何盡。』
拈則。記得。魯祖。凡見僧來便面壁。南泉開口。我尋常
向他道。空劫已前承當。佛未出世時會取。尚不得一箇半
箇他。怎麼驢年去。山僧今日見人來。迎來送去。拂塵點茶。
且道。與魯祖是同乎是別乎。夏久日勿若人爲我辨別。只恁
麼驢年去。伏以。衆慈久立珍重。
結夏上堂。結制何香初結制令辰云云皆同
此香呼道秋津洲。氣性冠五州。恭插金爐端爲祝延。今上

景慕焉。堂也微朴之餘熟願乎淡交。宇水茶話猶驚夢
諸嶽霜楮厚感情。雖然自沈沒荷浦之瀟水。不能陪河
漢之仙槎渴處萬斛。注以一珠。

眼空偏界。欺笑擲千萬里之鯁腸。氣奪群芳。奚屑滿九
腕之蘭蕙。常袖屠龍手段。深懷陷虎機鋒。宜清中越一
國奇見。勿怪大家百煉金鎚。恭惟某人四州獨脫。師四國伊
理之塵

問世孤標。翻轉定盤目星。盤目洞泉豁開屈棒頭眼。法華林
中初住吹萎花雨新好。靈楠樹下次住緜緜綴妙果流異香。應化也
如風行空。隨緣也似月臨水。坐斷立巖三千丈白雪。高
岡桐翠巖。看過有磯幾萬頃寒濤。瑞龍長銀瓜。五湖包
笠摩肩奔走。三國縉紳接踵歸崇。伏希。隻手長提宗綱。
九如高祝聖壽。

夏入上堂法語代人鼎三和尙
南閩浮提大日本國北陸道越後州前羽郡善根村瑞瀧山淨
廣禪寺今夏結制令辰。拈此一瓣香恭慕向瓦爐端爲祝延
今上。陛下仰冀法道長擁護。凡聖同沐單傳之祖風

○結制上堂法語

結制上堂法語結制何香初結制令辰云云皆同
此香呼道秋津洲。氣性冠五州。恭插金爐端爲祝延。今上

陛下欽願輝無窮國光。仁惠以長撫育萬民。此一瓣香。三十年來。執提運步。曾不欠自由。今謹投爐中。供養三國傳燈歷代祖師大和尚。高祖太祖。當寺開山。當寺傳法歷住諸大和尚。奉酬法乳大慈恩。伏願燈燈續焰。永不斷絕。子孫得力。門風益盛。

此香元無名相。強名謂木片。假生根。于星崎之七鄉。放開枝。於蒼津之古驛。而沈東海酒北山。皮腐全落。今恭把真寶。熟向寶爐。薰破。我本師當山開居老和尚鼻孔。奉苔恩波一滴。伏願壽山益高。德海彌深。永覆陰兒孫。垂語。九句禁足。佛祖勝躡也。今也藥法結夏。久今何隔。這理有具眼者出來通一線路。(問答)

提綱 不見道。至道無難。唯嫌揀擇。此語近而。其旨遠矣。不久參上士。爭得穩當。然雖與麼。又不可讓他底。畢竟如何。得無揀擇。其久日飢來張口昏來閉眼。自序 才也。不才無可一取。最暗自己。何堪建法席。今依推殺狂當其任。專得龍兄象弟補助與護持。幸全安居。嗚呼慚愧。

謝語 如例舉臨席人謝耳已。
拈則 記得。僧問洞山。如何是佛。山云麻三斤。只此一

則見來沒滋味。誤作脫體會去。萬劫千生何有。一期。若顯轉情波識浪。仔細下口則。始入佳境。至這理畢竟如何。相見洞山。其久日坐中盡是江南客。聽取鴉鵲聲外聲。

結夏上堂

此一瓣香、、祝延 今上、、、陛下仰冀。靈爽我狄。悉皆靡一天皇風。士農工商。同與仰獨尊德澤。

開山 此香。離念想觀而切瑣。和心意禮而磨礪。聊酬圓覺伽藍。教余安居和合僧會。令衆禁足蔭庇。本師及授業師 茲香入水火而不爛。遇風雨而無朽。分半片。以薰翻本師大和尚。福壽無量應身。法臘延長鼻孔。自餘半片。以報授業大慈父贖拳撫育之洪恩。所冀世世間薰沐禪測。孫子枝葉家風永扇。

釣語 第一義。鮑下明了了。肯來相分付。擬去不可。誰是這理承當得底人。有麼有麼。(問答)

提綱 袈裟角當面垂。鉢孟口向天開。諸佛安居于茲。列祖禁足于茲。未曾以袈裟帶飯者。即是袈裟安居也。未了被鉢孟禦寒凍者。不是鉢孟禁足乎。尋前願後失。得一念十忘。畢竟如奈。老來猶足醉知己。一片丹心磨不。謝語白地 忝垂應世手。證法鳴金鐘。雖振舌頰短。奈盡

謝詞。本山挫強扶弱。退高就低。有何傍侍親蒙提撕。隣峰同門耆年。他山剎利宗匠。山門兩序。一會弟兄。憐愚補欠。囊裏祖肩。悲喜溢臆。謝個難宣。
拈則 記得道吾智禪師。因僧問。如何是和尙深深處。師下禪床。作女人拜曰謝汝遠來。無可祇對。看道吾。雖最深。孰似。山野雙脚立地。至竟會又麼。勿道不道伏以珍重。

○轉法輪

賀光明山主結制盛事

慶雲朝繞法華臺。瑞向光明現處開。機熟三根同合轍。旱天枯竭蘇生來。

賀東海觀牛和尚結制盛事

看牛豈犯他苗稼。純熟收來得種耕。昨夜三更鼻繩斷。海東海北任橫行。

賀恩光雷門和尚結制接衆

遙望斗邊天曉惡。風雲際會有來由。一聲霹靂催驚蟄。毒氣猶鞭八十州。

賀正泉寺玄風和尚初法蘭 明治二年津島町 鼎三老師
東海海東廉勝勝。要津島上啓玄門。方今時勢周旋力。須報法泉鎮撫恩。

賀淨元寺祖巖和尚江湖會 結制
放開爐鑪接衆寶。大轉法輪利世人。現出淨元精舍裡。三千年古靈山真。

賀、、、結制 江湖
陸地翻波動迅雷。霽霽法雨灑香臺。江湖今日何祥瑞。優鉢羅華萬朵開。

又
手提斧鉞伏魔軍。閑擲直鈞釣芥津。澆季祖燈炬挑起。吾門幸是得斯人。

○三佛忌法語

涅槃忌
摩胸示跌露心肝。豈是雙林入涅槃。一把柳枝收不得。和風搭在玉欄干。

又

又

鐵牛吼破雙林月。石馬悲鳴五印天。生不生兮滅不滅。都來分附一爐煙。

又

柳暗花明二月春。雙林示寂趣泥洹。兜羅錦布不能覆。露出紫磨金色身。

又

靈性妙明混剎塵。去來浪迹復逢緣。李花欲綻梅花落。互古互今處處真。

又

滿城一夜落花雨。雨歇雲收對碧空。生滅隨時歸寂滅。真心怕爾覓無蹤。

降誕會

柳絲花紅春色濃。瞿曇出世尚迷蹤。雲門一棒令難行。也是關梨飯後鐘。

又

撲落縱橫不是塵。古今獨露法王身。南山雲起北山雨。洗出青山特地新。

又

不動一毫自現成。青山綠水可憐生。秬因唯我獨尊語。惹得人天多少情。

又

毘藍園裏隔埃塵。誕出圓明淨智身。錦上鋪花花簇々。風光爛熳畫圖新。

又

森羅萬象紫金光。歷々明々不覆藏。拈作浴盆香水海。乾坤大地一華堂。

成道忌

蘆藤雀肩喫麥麻。六年兀坐較些些。無端眼若一星子。添得虛空亂墜花。

又

果滿三祇道始成。放光動地度群生。一聲鐘唱五更月。枕上誰人夢未醒。

又

一見明星幾劫還。實成久遠現今時。全依修證忘修證。堪笑虛空畫雙眉。

又

隻履爲留示祖風。

又

香稻啄餘鷄鶩粒。碧梧棲老鳳凰枝。風旂雨洗祖師髓。人道少陵秋興詩。

高祖忌

曩祖金剛活眼睛。正當子夜日輪明。欲看頂相還難見。遠者應須暗裏驚。

又

遠求西祖屈詢衣。和箇心身脫落歸。解道一毫無佛法。風高月冷絕玄微。

又

大白峰頭參得禪。歸鄉只解墜空拳。跡埋北越深山雪。無那聲名海內傳。

又

光明藏裡吉祥相。解脫香薰散覺場。鼻直眼橫君自見。籬邊帶露菊花芳。

又

一盞分燈祖室中。無端鎮置老天童。證龜作鼈未曾已。

王宮去日顏如玉。山下歸時髮似霜。莫怪曉來叫成道。雪破溪梅漏暗香。

又

髣髴星移明了了。玉輪氣轉笑哈哈。彩文未露真難辨。枯木忽開雪裡梅。

○諸祖忌

達磨忌

萬里西來何所由。得皮得髓結冤讐。永成天下豎林禍。五霸兵戈猶未休。

又

十月清霜重。北風徹骨寒。普通年外事。一點亦難瞞。燒香云霧得老胡雙鼻孔。紅爐焰上起波瀾。

又

祖意西來君自看。空棺留履太無端。靈蹤何必在熊耳。昨夜窓前明月寒。

又

嚴爾真儀堪可仰。熊峰玉立嶺蒼穹。請看翠鬪白雲裡。

紅日三更耀海東。

太祖忌

萬古扶桑一國師。九重疑問似雲披。要看絕後光前德。露月中秋景轉奇。

又

黑漆崑崙夜走時。大千觸破沒由窺。唯餘五老峰前月。一片秋光未改慈。

○施餓鬼。大般若

施餓鬼

無脉靈源無米飯。山雲海壑熟多時。滿盤托出早成瞎。法界普周等充飢。

又

青山疊翠紫金臺。滄海潮生絕點埃。法喜滿飢忘施受。四生六趣飽參回。

又

虛空高掛寶樓幡。天地普應甘露門。一切祥生齊飽滿。十方同聚共飯源。

又

此日正當逢忌辰。寶樓羅列海山珍。法輪轉處食輪轉。飽滿生天受樂人。

又

廓爾寶樓發大青。莊嚴閣上玉玲瓏。爲君一粒未傾出。飽滿十方法界靈。

大般若

深々般若德無窮。幽禽啼雀說真空。萬物靜觀皆實相。柳自綠兮花自紅。

又

六百分文特轉辰。吉祥如意日鮮新。邪魔潛跡三千里。擁護綿々二八神。

○秉炬。舉鏢

尊宿秉炬法語

利濟多年生死流。東西不犯鐵船浮。思嵐特地添波浪。撐破須彌最上頭。伏惟新般涅槃某大和尚。坐斷去留。掃卻蹤跡。超越動靜二相萬歇千休。參得江湖諸師七穿

八穴。巖前毒龍吟枯木。眉底活眼照靈髓。向去威傳。雲犀翫月紋生角。卻來端的。蘆華隨風雪滿舟。

此是某大和尚。生前滅後。真正放收。橫說豎說。猶

有未周。即今現個大人相。且道將何摸索。其久曰

誰知四八端嚴相。元是西天老比丘。

又

不向如來行處行。丈夫志氣自天生。轉身端的無多子。踢倒從來傀儡棚。此是某大和尚。出生入死得大自在底

可謂。風采脫灑。頭角嶙嶙。足見多年。參尋知識隨卻

眼睛。無愧一旦。豎起法幢匡領徒衆。堪稱苦海船筏。

豈非佛國子城。即今覈化歸那伽實爲一宗不幸。此日盡

哀收設利須鑿四輩至誠。正與麼時何處見得某大和尚金

剛正体不關幽明。其久曰

醉勃風飄金片片。蕪蕪露碎玉品々。

又

古渡寂寥亡所依。舟師無復辨來機。寒松宿月煙巢鶴。夢覺江天自在飛。伏惟某、掃却蹤跡。出頭離微。

今日適西歸情。已千休又萬歇。昔時示西來意離四句絕

又

此日正當逢忌辰。寶樓羅列海山珍。法輪轉處食輪轉。飽滿生天受樂人。

又

廓爾寶樓發大青。莊嚴閣上玉玲瓏。爲君一粒未傾出。飽滿十方法界靈。

大般若

深々般若德無窮。幽禽啼雀說真空。萬物靜觀皆實相。柳自綠兮花自紅。

又

六百分文特轉辰。吉祥如意日鮮新。邪魔潛跡三千里。擁護綿々二八神。

○秉炬。舉鏢

尊宿秉炬法語

利濟多年生死流。東西不犯鐵船浮。思嵐特地添波浪。撐破須彌最上頭。伏惟新般涅槃某大和尚。坐斷去留。掃卻蹤跡。超越動靜二相萬歇千休。參得江湖諸師七穿

百非。所以枯木裏龍吟。髓裡發光輝。嗚呼。化緣已畢。人境又遠。會者定離。乍殘景桑榆脫餘影。生者必滅。奈成蹊桃李謝芳菲。此是某大、生前滅後。真心三昧。只出生入死大用現前。不存規則底樣。且道將何髮歸依備。其久曰海中穩駕泥牛入。天上倒騎鐵馬歸。

尊宿點湯法語

換骨靈方甘露味。醫王妙術絕比倫。琉璃瓶裏不傾出。萬劫渴兮空幾人。恭惟釋世緣已謝。清淨法身。幻生幻滅。來々去々。動搖揚古路。一味平等滴水滴凍。當下河口唇。不屬正偏物物顯露。不涉變遷頭頭天真。正與麼時。蓋子受用底。活三昧。如何宜揚去。真言一物無君勸。任手拈來着々親。

全點茶法語

古人趙州大法輪。三千刹界絕根塵。喫茶一樣無差別。未到會來不散論。恭惟釋世緣已謝。悉空諸塵。秋夜以之仰觀賞月。白沙翠竹。上。春日用之踏遍弄花。青山綠水濱。辨甘苦。類牙中。他焉得味。觀氣香。言語外。自不堪陳。用收六味。體抽八珍。這箇是名入平生底三昧也。即

今道得那一句更親。咄。
莫道清風生兩液。心身脫落合天真。

尊宿點湯

昨夜三更雲霧時。東方世界琉璃池。悲風頻拂無生曲。一抄等閑吾護師。伏惟新般、、、佛門白象。祖道金獅。理事不二。權實并行。遊戲三昧。神通無礙。

正與麼時。這箇一椀湯。如何得下筈。咄。
一口吸盡西江水。莫謂古人落韻詩。

全 點茶

屋後松風。拈投舊釜。細煎倒侵。自有甘苦。恭惟新般涅槃某、、大和尚。天下英雄。祖門鐵柱。明鏡當臺。妍醜自辨。鏡錫在手。殺活臨時。然雖恁麼。未後轉身一盞。有野父手裡。此日人天衆前。如何供養去。擊盞于曰。虛空有破片。大地無寸土。

春分居士信士茶毘法語

本來衣掛本來人。性父真空有正因。如電如泡如夢幻。寂光土淨絕纖塵。茲以名入還歸得本來人麼。其或未。更有丙丁童子說法。噫。

千峰雪盡寒猶在。處處梅花一樣春。

春分大姉信女、、、

樹々花開春已闌。四山殘雪動餘寒。驚雷繡出人安在。文彩縱橫仔細看。茲以名入生也恁麼來。死也恁麼去。去去來來。總是恁麼。恁麼之中。更有不恁麼底。還薦得麼。噫。處處綠楊堪繫駒。家家門戶透長安。

夏分居士居士、、、

往昔失忘依內寶。無禪長者立人前。忽然昨夜入君手。一段靈光照大千。夫以名入真性無染。隨處堪然。其來宛轉無碍。其去顯面完全。失之輪廻六道。得之超越賢聖。正與麼時。歸元一句。不涉變遷底。如何扶演。咄。網珠燦爛心水淨。山河大地共相連。

全 信女大姉、、、

生死去來一夢中。忽然醒覺住圓通。本源不昧天真佛。穢土淨邦絕異同。茲以名入南柯愛情盡。西方妙蓮紅。念到無念風清月白。法住法位海深山高。所以。溪聲山色談般若。鴉鳴雀噪說真空。正與麼時。到末後罕關。如何露重功。咄。

脫体無体活卓々。縱橫自在振威雄。

秋分居士居士、、、

明中暗與暗中明。天下知秋一葉聲。試向梧桐枝上見。崑崙踢倒涅槃城。此是名入因行掉臂底消息。許裏更無地着生死。雖然與麼山僧無風起浪拈出。未後轉身那一句。真久日龍得水時能變化。虎逢山處長威傳。

全 信女大姉、、、

一靈真性脫根塵。四照含空越果因。無有去來生滅相。試看火裡本來人。夫以名入生處。塵勞域。權現婦女身。會往詣道場。有修有證。今倒翻窠窟。無疎無親。雖。然如是。隨行一句作麼生指陳。投。火把。曰。虹銷雨霽江天靜。一對鸞鷖戲白蘋。

冬分居士居士、、、

千山雪覆異中同。萬家森羅歸王宮。孤峰不白同中異。一色那邊活路通。夫以名入還委悉麼。其或未。幸有。道箇在。投。火把。曰。漁浦風流尤皎潔。山村富貴自玲瓏。

全 信女大姉、、、

脫却娘生皮袋來。赤條々地絕塵埃。轉身一路無多子。木葉飄々下死灰。茲以名入即于貪瞋癡。證定慧。任于樂我淨。脫悲哀。且道端的臨行如何安排。咄。
四期男女合用。宜。春夏秋冬。一。信士居士信女大姉。見得形山秘在珠。玲瓏八面破昏衢。二龍爭去共相失。生死海枯一滴無。夫以名入悟草露衆罪。遊真性覺途。堅固法身花泣露。清淨光明月照蘆。所以。淨裸々絕。類。赤洒々脫規模。到。這理。未後履踐底如何指陳。咄。宛轉無窮離諸類。騰今輝古越。里。全。萬象森羅解脫門。一輪心月照乾坤。境亡光滅也何物。且喜還鄉舊脚跟。夫以名入頓捨人間愛。深知佛祖恩。生死岸頭。開正法眼。涅槃城裡。拈破沙盆。坐斷無是。頂顛。顛。預唯我獨尊。到。這理。本分一句不落。在第二頭。如何論。咄。
童子四期通用。

苗而不秀。雖堪堪情。也勝秀而還不登。知是靈根異凡卉。豈同老樹帶枯藤。茲以名入既得。怎麼種性。亦得怎麼呼稱。即今。脫却襤褸衣。踏翻傀儡棚。且道將。個怎麼。直印證。其久曰。莫遮白雲多變態。青山仍四碧嶺々。

華葉扶疎空劫先。芬芳豈逐艷陽天。昆嵐忽起摧殘去。種性何曾涉變遷。夫以名入夙挺麗質。遠落嬌妍。不拘回互。豈墮正偏。雖然與麼即今。如何履踐去。投火把云。等閑斷削黃金地。解脫門開徹九泉。

點茶通用法語 用四時男女可也

曹源一滴火中水。拈作松風絕愛憎。直下乾坤無底蘊。為君盛滿溢峽嶂。伏以名入捨貪瞋癡。皈佛法僧。空花影。只今三界廣。無繩自縛解兮。一生々澄。所以。隨黃泉無所入。向兜率忘上昇。如上名入飯元一路。即今趣茶毘之盛禮。到喫茶去。不到喫茶去。汝作麼生。下袴。咄。一口平吞三世佛。無明山上吐成燈。

點湯通用法語

文珠拈出玻璃盞。任手盛來石蜜湯。洗却無明生死熱。寂光淨土益清涼。伏以名入內積餘塵。外漏德香。曾喫却三寶至味。今不墮二乘常量。即心即佛。銀盃盛雪。非心非佛。烏雞化鳳凰。唯較乾竹汁。直取火中霜。如上何名入平生活計。即今我此一盞。販君之臨行汝如何。賞味去。咄。

奠茶通用

冷淡自知銀盃雪。蘆花明月不傳々。通身是口直吞却。穢土從來兜率天。夫以名入到這裡。此一盞湯。下口分明舌頭落。如何吞却。悟幽玄。灑。拈來問莫。溪山異。會取雲月一味禪。

奠湯通用

無味玄談難下唇。都來觸着壞通身。涅槃生死皆離却。拈作靈湯呈斬新。夫惟名入生緣已盡。佛果今臻。雖然與麼即今拈來。臨行賞味底一句。如何布陳。咄。相逢無言獨是立。虛空開口笑問々。

鑪香通用

鎖却大千界。從來不露顏。分明真寂定。內外絕中間。夫以名入正與麼時。大寂定中。如何解往還。聾。大道無門通活路。不留不礙祖師關。

起齋通用

夢中為夢南柯州。今日覺來初點頭。明月清風真面目。涅槃城裏自悠悠。夫惟名入到這裡。起齋一句。又且如何。喝。化佛舌頭留不住。踢倒法界尚未休。

尊宿鎖齋

冷坐少林月。祖風密正傳。魚遊兮鳥擣。的的飽參禪。恭惟名入珠璣衣內。密有君邊。無端。辨取水中乳。心地清開火裏蓮。雖然與麼飽參一句。如何扶演。咄。萬丈寒潭光射透。月明驚起獨龍眠。

全起齋

脫生死愛根。忽赴涅槃門。寶所有於近。直須照脚下。恭惟名入死散意馬。活投心機。頓築着娘生鼻孔。從他中路化城存。雖然與麼。出門之一句。如何商量。咄。靈堂欲問無人答。空拂巖苔送起還。掛真法語。不拘宿在家男女用可也。

夜明簾外涅槃城。妙相端嚴活眼睛。光照四維當面露。風流依舊振佳聲。茲以名入寂然空有相。凜乎悟無生。正與麼時。別有隨身露影底一著子。山僧更重。如何。分明。齋耶不齋試看取。印破江流。心月清。

○各寺開山忌法語

開山忌法語

光明藏裡活三昧。寂滅現前轉妙機。餘烈遺風誰不仰。葵花傾日吐芳菲。

又

示滅示生開祖真。瞻來仰去子孫倫。參同契裡示三昧。寶鏡圓中現大身。

又

所禮師兼能禮見。忘他忘自絕思惟。相逢師資雖奪首。辜負雙雙眼上眉。

又

眉目可觀明歷々。體前身後暗昏昏。來去何論在不在。青天白日怒雷奔。

濃州陽光寺萬開山寂端和尚疏 千丈和尚

降神。慧江。挺出岐嶽之質。負笈講市。冷咲葛藤之禪。旋踵擇師。於江西湖南。具眼轉機。於棒頭喝下。已竭磨甄作鏡之力。竟得擣旗奪鼓之譽。法泉波瀾。使人沒溺平地。端和尚嗣三法泉無得悟。石鼓音韻。信手擊動遠天。四坐道場而振真風。則鞭笞四海龍象。再還粉里而創梵刹。則攬結再世因緣。雖非直指之道。憐人情。無那浮雲之色。蔽天日。里民及村寺不許。使其因相攸。於金華山畔。乃迎真自白毫。塔中塔在。西江五條。最爾芽茨。雖不足以酬慈蔭。綿兮瓜。得蓋簪而修忌齋。縉紳護法而追廬山。鸞鳳覽輝而集岐阜。瓊鬚瀟灑。雖薄。黍稷稻梁維馨。鵲巢眉底月橫秋。靈鑑不昧。翡翠簾前。雞報曉。丰標可瞻。伏願。區區螻蟻之誠。享爲巴陵三轉。啾啾燕雀之賀。受作廣廈萬間。

蒙德寺萬開山門巷宗關和尚疏 全

生具驍騁千金氣。骨莫辱駱州之名。河之產秀鍾芙蓉。萬仍靈堪稱源氏之裔。緣遠韶亂。頗慕蕊蕩。會聞曹溪緒言。知有大事。獨究新豐宗旨。不泣多岐。潛行密用積功勳。撥草參玄嘗辛苦。泥牛耕月。拓開蒙德祇園。木馬嘶風。雄

據大中官寺。鉗鎚惡棘。規矩謹嚴。睥睨一時王公。卻掃名利塵垢。鞭笞四海龍象。振起祖宗風標。奈何。覆甍以折。則香倍揚。衣褐懷玉者光愈發。所以。泉岳勝概。似泉之穿岳奔流。龍雲經營。如龍之乘雲變化。與衆自在。無由摸索。逆順縱橫。不可端倪。真嶺嶺嶺。生。歲月悠悠漸遠。普集瓜瓞其茂。以哀瘞履之辰。謀炊黍稷維馨。敢做采蘋之禮。伏願。炳爾俯鑒。螻蟻之至備。惠然勿悒。鸞鳳來儀。

人才無限

原坦山

黃山谷曰。詩意無窮而。人才有限。以有限之才。追無限之意。雖淵明少陵。不得工也。予往年以爲確論。又聞崔顯題黃觀樓。後李白復登之。爲顯詩被凌壓。不能得句。遂登鳳凰臺成詩詞。予又謂甚哉。人才之難得也。白之才而如此乎。頃者翻然改曰。是非高論矣。人才者有限萬法亦有極。法苟無極。人才豈有限哉。蓋是匆卒之說耳。予又有詩贈人曰。胸中有詩泉。句水涌不止。云云。不知佗人以爲何如耶。

○作意と作例

「徒らに過す月日は多けれど。道を求むる時少しなし」と高祖大師の御示誨にもある如く。徒らに日月を放過して。一の所得なくてはならん。追々時勢に伴れて。僧侶の出世も早くなり。雲水修行などは餘程の人でも。十年か僅か十二年しか。出来ぬ事に成つた。舊時は三十年と言つた修行が。十年許りに切り縮んだ様なものだ。ろの中一所のお師家に隨心して居ても。助化とか教導とかに出掛られ。結制とか授戒とか教會とかに隨喜せねばならん。ガカラ實際の修行する間は甚だ少ひ。ろの少ひ時間を空しく。遊歩や睡眠や閑話雑談に費す様では。何事も出来ぬ。何事も出来ずして。住職でもすれば一代不都合勝で。暮さねばならん。ソナ會所の無ひ事ではイカン。何んでも人の出来る事なら自分にも出来ぬ事は無ひ。唯だ勤むると勤めざるに依るものである。ソコテ此の薦誦とか法語とか。一寸と六ヶ敷ひ事は。

叢林 作意と作例

始めからソウソウは出来ぬ。先づ絶句の詩を作り始めて。凡ら一百詩位を作りソレを作り直し讀み直して。韻字平灰等を一一點檢して。誤りの無ひ様にし。文字の配合音韻の正調意味の判明等を。幾度となく自分の合點の出来るまで。自分の了見に該落するまで改め改めして。一時として世に出し。自作として人に示すに足れりと。自ら信じて始めて他に贈りて他の批評講釋を受け。指點せらるる處あれば又た之を改作すべし。韻字平灰等は随分老功の詩人にでも。誤謬あるものなり。乍入初學の人達は猶更覺へ違へ感違へ等は。間々あることなり。故に自作の詩を人に批評して貰ひ。人の講釋を聞くは。甚だ作詩上洪大の利益あるものなり。自心に善ひと心得居ても。他の摘發を受けて。成程韻字の相違平灰の顛倒文字の鈍置等ありしと合點することあり。自分自慢の詩を他に披露し。他に諷咏せらるる程愉快のものななきものなり。一詩を作らば一詩を他に示し。一々自分の作りし詩に他の批評を請ふべし。批評せら

る中に豁然自得すること多し。
 七言絶句五言絶句を。自由に作る様になれば。五言律七言律と段々作り見るべし。禪偈摘葉。禪偈韻套。禪海沙金集。詩偈活法等の書を熟覽し。其中の作例等に倣らひ。可成く多作多詩なるべし。作詩の良法は。多作多改多讀なり。或人の話なるが。多作と多くの詩を作り諸体の作を爲し作意を合點すべし。多改と作詩を幾度となく改作して。一字一點も申分なき程に改め始めて好詩となる。多作すと雖も惡詩許りにては。上達の効能なく出精の利益なからん。至極の好詩は多改よりなるものなり。多讀と多く古人今人の詩を讀み之を多く記憶して。平生之を誦誦し自分の作意を養生せざれば。作詩の原素を缺き。何時も千篇一律の口調となり。變化なく妙味なく。他の讚賞を受くるの作を爲し難し。絶句は大智の偈頌。に越すものなく。諸体の作例は無塵の無孔笛。千丈の幽谷餘韻を熟覽精見すべし。見識とか宗乘とか言ふことは。餘程成熟の上ならでは發揮し難きもの故。幾多諸大徳の廣録等數

多あれども。先づ初學の參考としては。文字の精練諸体の具備してゐることは。無孔笛と幽谷餘韻に如くも
 のなからん。初學の人は之を座右に置き。卷中を誦讀して私淑すれば作詩作文上。自然熟達の域に至らん。近時の人にては奕堂の懶眠餘稿。坦山の鶴巢集。鼎三の天籟餘稿等は。随分諸種の作例ありて。初學の人の手本になるもの多し。
 佛門の人は佛門の骨格を備へ禪宗の人は禪宗の氣風を具へて。世間の文人墨客の如くなる可らず。最初に必ず宗門古人の作例に私淑し。作意を斟酌して後世間詩人の作例を見るべし。宗乘拈定教道布演の方便に使用するとなれば。之を遊山玩水自喜自樂の閑淡様にのみする様では。出家得度の人作詩とは言ひ難し。所謂道心を失はず。道心を基本として作意あるべし。詩は志なりとは古人の確言。一見一讀して此は出家の時。此は在家の時と判然する様に作るべし。之を以て。不平を漏し。不満を忍ぶ如きは。政治家或は投機商の不通を表し。奇景幽色を賞し或は春花秋月を詠ふは。

文人墨客の閑遊を示す。道人と言ひ道者と稱する者は須らく慈悲を言ひ。憐愍を唱へ兎に角得度他大願の意味を含蓄せしむべし。徒らに枕を照す燈火も。思へは人の膏なりけり」と咏すれば直に行誠上人の慈悲を思ひ。竹杖扶行歩。茅鞋度衆峰。乘時拈鐵笛。唱起滿山雲。」と吟すれば豈に奕堂禪師の艱難慈愛を思はざらんや。叢林などにては賀偈轉法輪など。自由に作る様になれば種々の題を設けて互に相研究練作すべし。結制にても出會すれば四九日位。遞番に會主を立て各頭の吟咏を一集して。其中上達の人あらば批評評論を請ひ。點檢添削を願ひ互に切磋琢磨すべし。
 賀偈轉法輪などに。その人の號や名をその儘の文字を入れるは宜しからず。その意味にて之を配分し餘り。有りの儘に入るはその人に無禮なりと。詩中にその人の技術等の賞揚し。その地名の山號寺號。本師。授業師。依止師等の尊名尊號などを。綴綴して宜しく配合あるべし。餘り推し附けの事を列べ。餘り不穩當の文字を使ふ可らず。

雙林 作意と作例

賀三奇雲嶺光首座
 奇祥現眼前。雲霧法輪轉。嶺上真如月。光明照四筵。奇雲嶺光の四字各句頭に一字宛冠らせ。法輪寺にて立職たりし故法輪の嶺と加へしなり。光は光明故月に縁近ければ月を咏する意味にて。起句を起し奇祥は吉祥と通して立職の祝意を表し。雲の霧るは。修行の功德にて迷雲の晴るるに縁み。法輪寺の嶺に大修行底心地開發の人が。真如の月に詠じ自己の光明蓋天蓋地なるを以て。四筵堂中を照破するに譬へしものなり
 賀三觀禪和尚住真福寺
 行脚幾多年。能耕真福田。道成將親笑。挽回壁觀禪。幾多修行脚修行の中本當の福田を耕し居りし故。正眞の菩提道を成し。その寺へ住職親笑して。壁觀の禪即ち達磨面壁九歳の禪を。挽回する意味なり。真福寺を真福田と通せしめ。觀禪を壁觀の禪に譬へしなり。
 賀三堅丈力生建法幢

堅固精神秀萬邦。丈夫志氣實無雙。釋迦孔子既撞着。三十年前建法幢。

堅丈力生年二十四五にて。結制を修す。堅固の精神が萬邦に秀でる位であるから大丈夫である。其の意氣は肩を雙ぶるものが無ひ。萬邦と有るから印度の釋迦と。支那の孔子とを引用して。既に閉口せしめた。それは三十成道と三十而立であるのに。二十四五で成道出世する人であるから。此人には逆も及ばぬであらうと。言ふ意味を布演したのである。是も甚だ過唱ではあるが。文章の上では白髮三千丈とか。故山去茲十萬里などと。大く言はぬと文字の活動が見へぬ。落花の事を美人天上落。飄逸の事を。羽化登仙なんと言ふ譬諭を爲し彌上想像を切實にせしむる事である。世の諺にも話半分と言ふ事があるから。詩文などは後世へ傳へて。餘程大く聞へる様に作つて置くのが宜ひ。賀偈や轉法輪。轉住祝偈等は祝賀の意を表する詩であるから可成り平穩に。其の人の功德を表彰し。其の

人の美事を賞讃するが宜ひ。時には師家より隨心に師匠より弟子には。訓誡的垂示的の文字言句を列べて。教誨することもあれど。先づ朋友とか同輩とかには。祝意表彰が第一の目的である先達先輩の人には勿論の事である。詩は作り作りする中に。自然に面白くなり。又自由に出来る様にもなる。始めは簡便に考へて。何んでも作れば宜ひ。餘り始めから六ヶ敷考へ込んで。題と添はぬでイカン。文字の配合が穩當でなひ。音律の調子が吟誦に適せぬ。此れでは詩にならん。モソツト精撰せんければイカン。ナントと言ふ風で考へれば。中々初心の人は本當の詩は一ツも出来ぬ。韻字平仄さへ無茶で無ひ限りは。その餘の事は暫く問はず。精々作り作り改めて漸々の域に達する様にするが宜ひ。鼎三和尚が小僧の時。白鳥門前の大石垣の工事中で。中々世話敷に。毎日一ツ宛詩を作つて居られたこの事である。ソウして段々勉強精勵の功を積で。天籟餘稿丈の詩文が出来た。奕堂禪師ナド始終叢林坊主で。

餘り文字には精通して居られ無ひ様な。考へがするがその遺稿は中々大冊大敷のもので。文字専門の者流をして開口せしむる程の力量が見へ。その辛苦勉勵の程が思ひ遣らるゝのである。雲水達は毎日世話敷世話敷とて。勉強する時間があり乍ら。唯閑話雑談のみして居る人が多ひ。勉強する心が有ればドンナに。世話敷中にも心得次第で。随分勉強の出来るものである。勉強が出来ぬ出来ぬと言ふ連中は。矢張り勉強する心が無ひから出来ぬのである。

寄二典座某

粥飯菹梅全不全。道心強弱缺與圓。衆僧苦樂存君手。以神親觀水架邊。典座は神を以て道心と爲すと。高祖大師の垂誡を引用して結句に用ひ。粥飯の出来不出来は。道心の圓なるに缺たるとに依り。衆僧の苦樂は典座の心得次第であるから。親く神掛けて勝手元に氣を附けて。賞ひ度ひとの意味である。

寄二書狀某

叢林 法用の要目

執筆公平記行持。虛心嚴正錄威儀。老禪任職如斯重。獎眼常開莫二放思。

書狀は日記日鑑を司り。衆僧の威儀進退を記録するの重任であるから。公平に嚴正に忌憚なく之を筆し平生明察の活眼を以て之を見聞し。放任放過して居てはならんがその依屬である。右の如く題意と該詩の構成とを。善く能く工夫熟思して例に依つて作詩すべし。絶句に熟達すれば。大概如何なる詩体にも。出来るものなり。始めより種々の諸体を稽古するより。絶句を骨折つて自由を得れば。段々諸体に通達することを得るものなり。此の編多くは七言絶句を例に掲出し。初入者の了解し易きもの而耳を引用し。座右參考の便宜に供す。諸体の作例は詩偈活法に依り。四六文鑑を見れば諸疏薦文等の作意を了解することを得ん。

○法用の要目

叢林は原と心地修行は第一の要目である。行持行法も

又た心地修行の一ツである。何程心地修行が立派に出
 来ても。行持が綿密で無く。行持が無作法であれば。
 完全の人とは言ひ難ひ。舊時は此の行持行法と言ふ事
 を。叢林では大曾八釜敷言ひ。授手や合掌が法に依ら
 めど。随分懺謝位はさせられたものである。三代、禮樂
 擧有僧徒ニとまで。賞讃せられた叢林何ぞ無作法に
 して可ならん哉である。

舊時は叢林の雲水衆と言へば。法用は如何な事でも。
 差し置かず勤めたものであるが。近頃は此の法用と言
 ふ事が。段々鹿略になる様である。幾程學問しても。
 平生の焼香の本導師一ツ。本當に出来ぬ様では。僧侶
 とは言ひ難ひだから。宗制にも大學林卒業後。一夏一
 解宛越能兩本山へ安居する事にしてある。一は高祖大
 師太祖國師へ報恩の爲にするので。二に學林許りでは。
 此の大切の行持行法が。綿密に了解ぬから。滿一年も
 兩本山僧堂へ。常詰させれば。行持行法の合點がで
 き人天教化の便宜を得るであらふとの。兩山禪師達
 の老婆心である。叢林出身の人は猶更此の處に氣を附

けて。叢林修行中に先づ一通りの。法要は心得て置て。
 イサ住職とか。或は師家の代理でもして。後堂とか衆
 僧頭でも。勤務むると言ふ場合に。差問の無ひ様に
 して置ねばならん。誰でも容易ひ事の様に考へて居る
 が。計らず其任に當ると。迷惑するものが多ひ。是は
 平生の用心の足らぬからである。堂行で無ければ。磨子
 や手磨は附ける事はイラン。知殿で無ければ本堂莊嚴
 ナゾはイラン。典座で無ければ料理調菜は知らぬで
 もエイ。と言ふ風では何年叢林に居ても。何の役にも
 立たぬ。各頭將來は必ず住職するので。住職すれば七
 十三役の總兼役であるから。何役か出来ぬでも。差問
 へるから。叢林に居る中に能く氣を附けて。放過せぬ
 様に修行して。何役でも直ぐ間に合ふ様にして置ねば
 ならん。雲水が師家に隨身をするので無く。隨心をす
 るのだから。唯形体許り其處へ持て行つて居れば宜ひ
 と言ふ風で。何も如も心得ずに。無駄に叢林で月日を
 送ると言ふ事はならん。隨心とて心を持つて行つて。
 萬事萬端其の師家の家風。師家の宗乘を繼嗣して。其

の師家に代つて。又た師家と成ると言ふ氣概で。何事
 でも放心せず。日用光中茶裡飯裡別處に向はず。厠尿
 糞尿總べて王三昧の中にありて。難行苦行して。始め
 て大自由底の人と成るのである。叢林に三年修行して
 も。堂行一ツ本當にイカヌ様では。修行したので無く。
 唯叢林をヒヤカシタのである。雲水の中に餘程精出し
 て。師家にも尋ね。同參上達の人にも問ひて。先づ諸
 經の諷誦法。日用の行持。諸講式の曲節等は必ず。一
 通り何役に配せられても出来ぬ事の無ひ様に覺悟して
 置ねばならん。少し氣を附ければ六ヶ敷事では無ひ。
 結制などには勸發してでも。羅漢供養。大布薩。報恩
 講式。唱禮法。歎佛。懺法。位は勤めて會中残らず。
 配役も相互に轉換して。大概一遍宛は何役でも。勤め
 て見て。親切に稽古演習をして。其の法要を立派に勤
 修し。且つ自身一代の所得にする様に。心得て置くが
 エイ。一寸と自由黨派の雲水でも居ると。演習などは
 ツマランなんと亂暴な事を。言ふ連中もあるが。世間
 一場の娛樂に供する。芝居。曲藝ですら其の前から

下稽古をして演藝するでは無ひか。兵隊が毎日軍も無
 ひに戦争の演習をするでは無ひか。是れはイサと言ふ
 場合に平生稽古をして置ぬと間に合はぬからである。
 一切衆生に發菩提心せしめ。十方の檀信に得無上道せ
 しむる底の。太切なる僧侶の本分なる。此行持此講經
 に向つてツマランと言ふのは。無慚愧漢である外
 道天魔である。兎角僧侶は慚愧心が第一の護身法であ
 る。世尊も慚愧の服は諸の莊嚴に於て最も第一とすと
 訓誡遊ばされ。古徳も「何故に斯くなる身ぞと折折は。
 姿に耻じよ墨染の袖。」と垂示し給へり演習何んろ無益
 なる。稽古何んろ無駄事なるや。能く善く稽古をし。節
 慎をなし。演習をして如法嚴格に。勤修するか宜ひ。
 高祖大師の羅漢供養に。羅漢の應現せられたなごば。
 心身一如の行持だからである。習はぬ經は讀めぬ。行
 かね處は見へぬとは。小兒の言ひ草であるが。講式行
 法も稽古をし。演習をして始めて熟達するのである。
 一代僧侶と成つて。商法するで無く。政治に關するで
 無く。工業耕作するで無く唯だ只だ。衆生を度し群類

を濟ふと言ふのであるから。學問と言ひ修行と言ふのも。文字字上にのみ拘泥して。身相行實を調定する事に氣が附かぬでは。人天の大導師とは言へぬ。纏らずして衣耕さずして食ふの人物。度衆生濟群類底の行持を行持せず。世界人類を利益せずんば。人間の厄介師と言はねばならん。此に六ヶ敷小言を言はぬでも。各頭隨心の依止師の命令に依準して。必ず叢林修行中に。洞上一通りの法要は。心得て置いて一代不都合なく。之を行持して其の本分其の天職を。味さず勤むるのが肝要である矣。

心

坦山和尚

心也者萬法之原歸也。唯佛盡之。聖能全之。賢能至之。迷之者爲癡。僻之者爲邪。其邪也非有損矣。其盡也非有增矣。明與不明而已矣。蓋夫天地之成敗。萬物之終始。皆是一心之變幻。而未有一塵之在其外者存矣。是以得其法者。顯天地於毫端。納大山於鍼孔。復奚足怪焉。然而至之有道學之有方。於是乎其教立

矣。其教所以有深淺廣狹者。從其器之小大也。大也者謂其容納也。小也者謂其味劣也。且其小大復各有所異矣。有人於此。各二其耳目一其鼻孔。而無三脚兩首者一也。然而老幼男女好醜長短。未嘗混然不辨焉。是以其有異也。又如挹諸海者。以大則有多水矣。以小則有小水矣。其器之小也。雖挹諸海而不過斗升也。雖取諸淡濱。而亦足以充其量也矣。蓋不睹萬流之壑汪洋之富矣。若夫萬國之器。不容演漬。一握之器。難臨蒼溟。其分然矣。然則安演漬者。不足與語蒼溟之大也。屈小道者。不能與議大道之原也。小者小成之。大者大成之。未必膠守一法以不通其他也。蓋鑄群器源焉心疾。要在盡其全焉耳。且夫謂其廣則。十方佛土。語其遠則。則無窮。有權說焉。有實證焉。權則有廢立之法。實則取捨之情絕矣。苟自非深其道者。烏能識其所以焉。賢者特得之。不肖者祇信之。信之不已。而後能至之。是故小大雖異其所歸者一也。經曰十方之中。唯有一法。其此之謂也。

叢林茶話

叢林と雲水

叢林と言ふ事は其の字の通りて叢の林と言ふので其の意味は、草でも木でも、孤立するものは、曲り易く、風雨に傷み易いので、生長するもの、遅ひけれども、群立するものは、直く伸びて、風雨の害も少く、生長も至つて早ひのである、それを方取つて、修行する年少僧侶の聚集つて居る處を叢林と名づけたので、僧侶も一人や二人居る時は、我儘許り増長して、難多の五欲六塵に惱まされ、菩提心の衰枯を來たす様な、慘風悲雨の目に逢ふことが多ひが、大勢一所に勉強する時は、お互に切磋琢磨して、諫言勵語相ひ競争して、ツンツン修行するから、五欲六塵の入り込む間隙が無ひので、自づと心華開發の時節に到るのである、勉強する箇所を、舊時から梅檀林とか學林とか、言ふのも、外の説明もあるが、先づ此の叢林と言ふ意味を、方取つてツマリ林の様に、澤山群集つて、修行した方が、

叢林茶話。叢林と雲水

効能が多くて弊害が少ひと、言ふので、兎角人少孤立は、我儘が増長するから、大勢一所に勉強した方が、便利である、雲水とは佛道修行の爲め、諸國を遍歴する、少壯僧侶の事を指した諺名である、雲と水とは、自由自在の往來で、何處の山、何處の海、何處の谷、何處の川を嫌はず、行き到らぬ場所が無い、然して、至極淡薄のもので、聖賢が無いので、雲水もソレ言ふ風に、其の境界を清潔にし、其の精神を脱白にして、身心一如に修行すると、言ふのである、行到水窮處坐見雲起時、ナント言ふ文句は、其の實際を表彰してをる、修行は兎角雲水の時で、無ひ事には、出來ぬ、住職でもすると、ドンナ小院でも、ソレ檀中の法事だ、ソレ隣寺の法用だ、ソレ組合の用僧だ、種種難多の俗務俗用の爲に、追ひ廻されて、トント何事も手が附かぬ、尤も不規律に、最も不順序に、世話敷から、中々住職してからは、修行なんぞ出來るもので無い、日用の行持に規律ある、自己の精神に安逸のある、雲水時代に、セツク精出して修行をして置かぬと二代人の

背後に立ち、他の指揮を受くる様な事になる、善く好く考へて、怠惰をしたり、道樂をしたり、せぬ様に、雲水時代を、勤直に精勵に、経過せらるゝのが肝要である、何處の叢林でも、雲水の好人物が居らねば振はぬ、尤も、お師家も、熱心家の道徳兼備の人で無ひと、好人物が集らぬ、雲水を利用して、自分の出世の踏臺にせよふ、ナント言ふ野心家の、師家も随分、少くなひ今日此頃、雲水たるものは、能く師家を撰定して、随侍せぬと修行處か、自己の精神さへ、墮落さする様な事になる、二十前後、三十年前は、人生一代の、成業不成業の一大時期だから、ノラクラ、ヒヤカシ廻らぬ様に、何んでも修行の出来る、叢林教育の行届く、師家を撰定して、安居するが専一である、人か大勢集つて居ても、修行の出来る人物の少なひ處は、少叢林、縦令少人数でも、修行の本當に出来る、人物のある處が。大叢林である、何んでも、大叢林を見掛けて、掛錫せなければならぬ、ソウシテ、今の雲水は、雲水と言はれると、何にか愧しひ様に思ふ人達がある、お前様

は、何處の雲水であると尋ねると、へい私は何處の住職で、一寸と補佐に、出會して居ります、ナント言ふ人がある、ナントモ今の人は、自分の修行より、唯住職と、無暗に肩書を欲したがる人が多ひ、住職と言ふ事は、其の寺院で、一寸出世の止りの様なもので、雲水と言ふは天下横行の位置で、何處の大寺大院より、何日何時、請提を受けぬにも限らん、多望の唱號である、舊時の人は、住職して居ても住職と言ふ事は、匿して言はなかつた、現今の人は、住職もせぬ中から、何寺住職と言ふ事を、言ひたがるのは、雲水の無上の榮名たる事を、知らぬからであらふ、明治初年に、東京の書生達が、書生書生と囁言するな、今の大臣官は皆な書生と歌ふたこの事であるが、書生と言ふ肩書は、未來の大臣を、豫想せしめたので、何官何位と少官微祿の人と、言はれるよりも、書生と言はれる方が、名譽と信じて自負して居たのであらふ、雲水と馬鹿にはせずと修行せよ、今の禪師は元の雲水と言ふ風に、モウ少し元氣を附けて、小地小院ナドは、

請提でも住職はせぬと、言ふ氣概で無くては、本當の修行は出来ぬ、今の雲水達は、早死の覺悟許りして、早く引込む算段や、樂隱居でも、する工夫許りして、居る様に思はれる、ツマリ出世を急ぐからである、奕堂禪師の山科の大宅寺初住は四十前後、悟由禪師の金澤の龍得寺初住は三十五六である、今の雲水は二十五六にも成ると、住職でもせぬと、何か罪科でも、ある人の様に、言つたり思つたり、する習慣が、何處の叢林にも發生した、實にツマラン話である、お師家其人も、年少の間に合はぬ住職許り、集めるよりも、老骨の何んでも出来る雲水の、澤山居る方が名譽である、或る結制に配役をすること、住職や更衣許りて、罷參や無杉が二三人しか無くて、配役に困つたこの話がある、コウ言ふ風は叢林の衰微である、何んでも叢林は、雲水の立派の人が、澤山居無いと盛大にいかぬものである。

○願心と願行

願心と願行は雲水の骨髓にして、實に雲水の命脈なり、

願心願行なきの雲水は無精神の雲水なり、願心願行ありて、始めて雲水の効能あり、二十年三十年、東西行脚するも、願心願行なき時は、無駄骨折なり、願心を起し、願行を爲すの、三年の修行は、無願心無願行の十年の行脚よりも、其効甚だ多かるべし、願心と言ひ、願行と言ふ、唯日用の行持を、衆に先んじ進んで、勤行する事なり、怠惰なく怠慢なく、人に後れず、人に劣らず、普請に作務に、自分の分限り根限り、精出すことなり、始めは苦しきも、勉め勤めて習ひ慣すなり、身体健康に、精神活潑に、日に自ら愉快になるものなり、其の中に人にも重せられ、自らも尊くなり、心身一如に、願心願行となるものなり、奕堂禪師、風外老師座下において、或年老師の助化先の寺院に、典座を勤む、甚だ枯淡に、甚だ親切に、骨折を惜まず、精精常什の荷擔を爲す、堂頭和尚難有涙を垂らし、隣寺に世話人に、其の願心願行を披露す、隣寺組合皆な、奕堂様が典座を勤めて被下なら、此處五六年引續き、當組合にて、江湖を致しますと、老師に申込み、

願心奕堂の美名、其の近傍に高かりしと、天下獨歩と言ふ、大師家でも、座下の雲水に、願心願行の人が無ければ、助化先や教化先は、無ひものです、誰様を請提したいが、雲水の亂暴には困まる、何殿を御依頼したひが、座下の無願心には閉口だ、ナント言はれる、た師家様も、随分少くなひ、亂暴と言ひ、無願心と言ひ、自分に怠惰して、徳の様な考が、早や違ふので、自分の徳を損じ、自分の身を持壞す基本である、ツマリ一生廢物で暮らす原素なのである、世の中へ出で様、人物に成りたひ、どの考なら、人より精出し、人より骨折ると言ふのが、根原である、願心願行は、人を助け、世を益する、仕業にして、其の中に、自分の成業と出世は、知らず識らず現成して行くのである。

○意氣と雅量

意氣と言ふことは、近頃大に廢つた、誰も口上手、手眞似上手の、八方美人許りで、英雄然と構へたり、素傑乎と力むと言ふ、先生は少くなつた、結構か不結構か、道人は甚だ感心せぬ方である、ツマリ其の本領

と言ふものなく、其の本分と言ふものを、幾分か味ます處から、向様の氣嫌取りに、た口上手も申し上げ、手前の損所隠しに、た手眞似上手もせねばならぬと、言ふ風では、世間は知らず、出世間では、宗風落地と言ふより外はなひ、ト言つて餘り構へたり、力むだりすることを、獎勵する方では無ひが、兎に角近年は、禪宗坊主に、氣骨のあるものが、少くなつたのは、所謂時勢の加減もあるが、ドウカと言ふと其の本領(所謂禪定力)に乏しく其の本分(僧侶の身持)に缺る處が多ひので、知らず識らず、た上手者に、成り下る先生が、日増である、雲水達は、修行の時から、善く好く、考へて餘りた上手せねば、ならぬ様な者に成る可らずだ。

いたら、それをふせて、其の上へ登り、送行上堂だと言つて、雲水の問答を受けて居た、桶の箱が天氣で撥るんでたので底がぬけた、スルト和尚ツイト、桶の淵へ飛び乗つて、曰く、月落ちて天を離れず、寒山和尚彦根の清涼寺に住持たり、或日大守のお相手に、種種のお話序に、生きた地獄極樂が、見たいどの御所望、スルト和尚、殿様を案内して、客殿から本堂、本堂から禪堂と、グルグル連れ廻つて、行常りの、角に待ち伏せして、中啓を以て、何氣なくトス、御座る殿様の頭を、イヤット言ふ程振つた、殿様が怒る怒る、カン／＼に怒つて、切捨てるのか力味、和尚は平氣なもので、御前生きた地獄極樂は、筒様で御座る、何氣なくトス、お廻りの中が、即ち極樂、ボント一ツ叩かれて、お怒りめさるが是れ地獄、地獄極樂は、心一ツの轉變で御座ると、言上すると、殿様が、成程とお合點か參つた。

宮の(尾張熱田町)か姥橋に大陸和尚が、テグ／＼肥へ太つて、欄干に腰掛けて、休んで居た、スルト向ふから、

雲水が袈裟合利を掛けて、三人トストス、ヤツテ来た、大陸和尚が呼び留めて、貴様達は何處へ行く、へイ尾張へ参ります、尾張なら此處だが、先づ學問がしたケリヤ宮の白鳥山に、鼎三と言ふ、學問坊主が居るから、其處へ行け、説法がしたケリヤ名古屋の高松寺に、説法と言ふ、説法坊主が居るから、其處へ行け、坐禪がしたケリヤ、吾れの處へ來ひ、ソレは貴僧は、拙僧か拙僧は、大光院の大薩と、氣焔萬丈雲水歴然たり、坦山和尚、京都近邊の、或る小院に住職として、或る年或る師家を請提して、結制を修す、制中夜半、心性實見録、感病同源論、等の、感覺類發して、精考熟案夜を徹するも成らず、曉天に其寺を出售す、衆僧堂頭和尚の不在を覺り、搜索手を盡せども、其の所在を見ず、方丈の机上に一書あり曰く、

小清儀、心量界の一大事件成功の爲め萬事拋擲、仕度當寺出奔致候間後事宜敷御取計相成度願上候
結制は宗門の一大事なり然れども佛門の

の一大事には相更難申候

光輪和尚、鳥羽の常安寺に住す、結制授戒等、他方の請提を好まず、常在講本、専心一意、唯雲水の教育に勤む、座下常に三四十箇の、銅頭鐵額、錚々として研磨窮學す、或時突然、小僧は兩山貫主より、大學林の效頭に、任せられたから行きますと、百之長老(徒弟)を連れて上京の途に上る、後事の附托、寺務の依頼、衆僧の出入等、一言も之に及ぶなし、座下皆な茫然自失するもの久し、雅量と言ふのは、早く言へば、堪忍力が強ひとでも言ふのか、ツマリ人を容るゝの量見が廣濶と言ふので、餘りコセコセ小世話を焼く、小言を言ふといふ事の、無ひ方で、コソコソ物事に頓着せぬ、ツマリ大人物の胸中で、所謂光風露月の的である、コウ言ふ人物は、近頃少くなつた、往昔足助の香積寺に、三人雲水の奇物か居た、甲は侍者を勤めて、毎日毎晩坐禪三昧で、面壁静坐のみして居る、スルト堂頭和尚か、蒲團を貸し

たり、坐蒲を呉れたりして、貴公は我宗の骨髄だ、他日宗風を大に宣揚するであらう、ナンテ大僧加愛た、乙は典座をして居て、毎日毎晩自分の寮で、コソコソ本の書入や、句雙紙の清書に、骨折つて非常に文字上に精出す、堂頭和尚之を見て、喜んでコウ言ふ事がある、コウ言ふ本がある、コウ言ふ書入があると、惜まらず匿さず、本を貸したり、事を教へたりして、貴様は吾宗の命脈だ、從來吾宗の宗師家は、多く文字に昏ひ爲に、化門を廣く張る事が、出来ななんだ、貴様は文字に勉強するから、我宗の爲に他日化門を張るのでアロ、と始終讀めて居た、丙は送供をして居たが、大風呂敷の、大法螺吹で、ドウカと言ふと、亂暴の方で中々、豪氣堂堂と言ふ風で、何事も天性的に、一聞百見皆な了得すると言ふ蓋梅に、大骨折らず精出す、自づと領解會得するのである、堂頭和尚は之を叱りもせず餘前は吾宗の本領である、禪宗坊主は禪宗坊主ラシク、氣骨が無ひとイカン、尊前が世に出れば我宗も、大に振興隆盛するのであらう、と何時も相手にして、

快談した、此堂頭和尚の雅量の廣濶には、豈に驚かざるを得んやで無ひか、其本領其本分を、充分に發揮せしめて、人を拘束せず、人物を造るに妙を得た和尚で無ひか、ソレモ其筈、堂頭和尚が風外禪師、甲か奕堂和尚能本山獨住一世廣濟慈德禪師乙が鼎三和尚(法持法隆開闢秋葉復寺開祖本山西堂白鳥鼎三師)丙が坦山和尚(帝國大學印度哲學部講師東京學士會會員大學林總監原坦山師)である、天下の宗師家達よ、唯願くは少しく風外老師の、鉗錘の仕方を真似られんことを希ふ譯である、又雲水達も具眼の宗師家を見て隨侍し、心地の修行が必要である、所謂ヒヤカシ雲水は何年しても、爲になりませぬ、利己主義や、利財主義や、功名主義の師家に百年隨侍しても、一の所得なく、一の解會なく、一の利益なからん、親切に雲水の世話をす、修行させる、人物に燒直してやると、言ふ蓋梅の師家で、自分の身分、自分の名利を、抛下する底の、人物に隨侍するが、良禽撰木窠、良臣擇君事、ナンと言ふことは、無馳事では無ひ、所謂本領あ

る本分を味まさぬ、所謂人を容るゝの餘裕ある、意氣雅量の大宗師家に隨侍せよ。意氣軒昂ナンと言ふは、軍人の戰場に出た時、敵を恐れず身を輕んじ、進んでスワー一戦と言ふ場合、毛髮卓立する様な氣分を、言ふのであるが、僧侶に斯言ふ風の殺伐の意氣は、餘り必用で無ひが、幾分か禪門の人物は、斯言ふ氣味を含蓄せぬと、人物に活氣が無ひ、女子小人や爺婆を専門に、教化する第二義門底は暫く置き、禪は陸海の軍人に必用なり、禪は外交の官吏に必用なり、禪は冒險の商業家に必用なり、禪は社界の活氣なり、禪は社界の防腐劑なりと、持て囃さるゝ今日此頃、爺婆のお氣嫌取に毎日、飛び廻る様なお師家様の多ひのには、實に心細ひ話である、從上の人物が全然、禪宗坊主の完全無缺だとは、言はぬが、意氣と雅量と言ふ點には、幾んど調然する處が無ひらしひ、コウ言ふ氣量を鼓吹せぬと、禪門は今後彌々益々、衰運に傾くであらうと思ふ、東西の師家、南北の雲水達は、其の考へで薰陶し、其考へで修行すれば、幾

分か、挽回の時勢に向ふのであろう。

○師家と隨心

隨心の師家に對するは、生生世世の大恩師にして、安
居證明開發悟道を得せしめて貰ふたので、粉骨碎身
しても、其の報恩には當らぬ、師家の隨心に對するは、
慈母の赤子に於けるが如く、從晝至夜、唯愛護の念に
住して陰陽なく、之を保育するので、隨心が師家を忘
れて居ても、師家は隨心を忘れられぬと、言ふ程で無
ひと、本當の宗師家とは言へぬ、ソウして慈誨教訓至
つて、嚴格で無ひとイカン、少壯氣銳の年輩許りの、
集會だから、放任して置けば、皆な五欲の奴隷となり
丁つて、放逸無慚の人に化し去る者が多し、ナンデモ
看過せず、日に制裁を附けて、教育せぬと人物にな
る者が少し、狼支樓とか、虎佛通とか、お婆々面山
とか、番太良範とか、言ふ譯名のある位で、斯く惡刺
の手段を取つて、鐵面皮に誹責して、悔過迷善轉迷開
悟せしめたのである、教へて嚴ならざるは師の過な
りと、言ふ文句もある、兎に角若し先生達は、ナンデ

モ放過させぬ様に、諄諄と訓誨せぬとイカン、其中に
言ふ可からざる親情を含み、宜べ難ひ程の慈愛心が無
ければ、以心傳心に大事を授けると言ふ事にならん、
唯だ嚴格許りでは、無慈悲になる、能く叱り能く教へ
ると、言ふ風にせねばならん。

聽水和尚座下に佛心周防の人と言ふ雲水が居た、或時
授戒に維那を勤めて居て、ドウ殿鐘を聞き違へたか、
一會が上ると直ぐ、手膝で和尚を迎へに行つて、本堂
へ引出したが、本堂に僧衆が一人も居なひ、和尚が大
會怒つて、八釜敷言ふたが仕方が無ひ、佛心一人で構
はず、維那位に直ん立つて、大悲呪を初めて大聲で讀
み始めた、和尚がコラ／＼言つても、聞へぬ様な風で、
ズン／＼讀んで行く、和尚が腹を立て、持て居た笏
で佛心の頭を擲つた、スルト頭に少し疵が出来て、
ラ／＼と血が流れ出して、顔から傳へて衣や袈裟に、
色を染めても、少しも構はず、其御經の濟むまで、ナ
ブリもせず、平氣で居た、參詣の衆が大會氣の毒がツ
て、禪宗坊さんの氣象はエライ物だ、修行は中々六

か敷ナンテ八釜敷話しに寝め靡した、和尚が歸寮する
と、直ぐ佛心を寮へ呼んで、自分の膝の上へ抱き上げ
て、顔を摺り附けて涙を流して泣いた、己れも一時の
腹立で擲つたが、貴様の氣象には感心した、實際一人
前の人間にしたひと、思ふ老婆親切だ、必ず惡く思ふ
な、コレが養生料(金五圓)で此れを(衣と袈裟)貴様
に呉れる、告病して介抱せよとて、其處へ投げ出した、
佛心の言ふには、生命までもお前様へ差上げる氣で、
修行に來ましたから、叩れたり擲れたり位には何んこ
も、思ひませぬと共に泣いたとの事である、此位の親
切と此位の敬慕心とが相互に、會通して始めて、師家
と言ひ隨心と言ふ甲斐がある、師家も雲水を集めて、
蘭茶葉間に東西南北騒ぎ廻り、隨心もノラクラ、ヒヤ
カシ半分に、遊山配水すると言ふ風では、兩方とも親
切にするとか、敬慕するとかと言ふ事は無ひ、唯流車
の乗合か、途中の道伴の様な搦梅で、兩方が其場限り
に、面白ろお可祝ふ、法螺を吹き合つて、教訓をする、
慈誨を蒙ると言ふ事はなく、只話相手の如く、興行

中間の如く、に日送をせると言ふ様な事では、雲水の
世話する、甲斐もなく、行脚修行する所詮も無ひでな
ひか、願くは師家も實際に雲水の世話をして、學道修
行せしむる、雲水も本當に隨心して、勉道修學すると
言ふ風にして、貰ひ度ひのである。

○古則と公案

古則とは上釋迦牟尼佛より、下三國歴代の祖師達の、
其の修行を成された折節の、故事來歴を言ひ、公案と
は其の故事來歴を、判斷工夫了解會通する案文手本に
すると言ふ事である、凡そ其數が類別して壹千七百則
あるとの事だ、道人の考では、近頃のお師家達は、古
則公案の教へ方が、餘り六ヶ敷過ぎると思ふ、此公案
の性質は、ソウ言ふものでは無ろふと思ふ、ソウソウ學
人の心地修行の程度を、試験するに古人の修行せし分
際分限に、割り當てる、寸尺分量を見るのであるに、
古人が斯ふであるに貴公が此様ではいかんと、一返に
彈ね飛ばして、其の途中や其の道行の文句に、種々難
多の奇變妙珍の事柄を、附け添へて學人をして、彌よ

五霧里中に埋却すると言ふ、公案家が多い、公案は何
 んでも、六ヶ敷言はぬと味が無ひとか、公案は早く合
 點させる難有思はぬ、ナンと言ふ蓋梅で、非常に
 矢鱈尾鱈を附けて、學人達を困せると言ふ先生達も少
 くなひ、道人は斯言ふ蓋梅に拈定したひと思ふ、
 擧す僧趙州に問ふ如何なるか是れ祖師西來の意、州
 云く庭前の柏樹子

即通道人著語して云く、禪宗極意の難有ひ法の心
 得は、如何で御座る、左様さ、御前の庭の前の柏
 の樹さ、ドウ合點します、能く聞きなさい、柏の
 樹は生へた時から、柏の樹で、枯れた後まで又柏
 の樹である、ソウソテ肥料を施せば、ピン／＼肥
 へ太るし、根を荒れたり枝を切たりすれば瘦せた
 り枯れたりする、枝を切つて佛前へ備ふれば佛花
 となり、葉をチギツテ團子に巻けば柏餅となる、
 少しも自分のシノシヤや分別は出さぬ、何れの時
 何れの處でも、柏の本體は味さぬ、梅の様に香薫
 くもならず、櫻の様に奇麗に開花もせず、桃の様

に立派に結實をもせぬ、唯柏の樹は柏の樹の通し
 切りである、人間も其の通りで、其の身分身分を
 通し切つて、主人としては主人の通し切り、家來
 としては家來の通し切りで、豪家は豪家の分限通
 り、貧人は貧人の分限限り、各職分職業を精
 出し、各自自分の本分を味さず、親は慈愛を子に施
 し、子は孝行を親に盡し、夫婦相和し朋友相信す
 る、ナンと言ふ風で、味噌屋が酒屋の眞似をせず、
 大工が左官の積古をせず、味噌屋は味噌屋の一本
 立、左官は左官の一人前、君が臣にもならず、臣
 が君にもならず、能く撫育する能く忠義すること
 を、君臣道合と言ひ、これで天下太平です、國土
 安穩です、平生柏の樹柏の樹と思ふて忘れぬ、柏
 の樹が何んだ、柏の樹は柏の樹です、毎日人間人
 間と思ふて忘れぬ、人間が何んだ、人間は人間で
 畜生でも餓鬼でも修羅でも地獄でも無ひから、人
 間で一生送らねばならん、柏でさへ柏で枯れる
 に、人間が人間で死ねむと言ふ事は無ひ、人間が本

當に其の本分を盡せば、佛道では必ず死ねば成佛
 する事に決してある

雲水の時は雲水の通し切りで、和尚になれば和尚
 の通し切りと言ふ風で、味さねはエ、胡麻化ね
 はエ、修行の時には修行をする、化導する時に
 は化導すると、其時其分に應じて、其位置其本職
 を失はぬ様にする丈の事である

擧す洞山因に僧問ふ、寒暑到來如何んが廻避せん、師
 云く何んぞ無寒暑の處に向つて去らざる、僧云く如何
 なるか是れ無寒暑の處、師云く寒の時は闇梨を寒殺し
 熱の時は闇梨を熱殺す、
 即通道人著語して云く、熱ひ寒ひは如何して辛棒
 します、左様ですな熱くも無ひ寒くも無ひ處へ行
 つたら宜ひでショウ、ソレハ何處です、ハアソレ
 ハ熱ひ時は熱ひと思ふ横着な考を心で制止を附
 て、熱ひと考へさせなひ、寒ひ時は寒ひと思ふ愚
 癡な意に退散を命じます、熱ひ時熱ひと言へは猶
 熱し、寒ひ時寒ひと言へはいや寒し、ナントと言

ふ川柳がありますが、熱ひ熱ひと暖くとヨケ熱く
 なるのは情が熱して熱くなるので、寒ひ寒ひと縮
 み込めば意に怯氣が差して寒さがヨケ身に侵みる
 のである、ナニコンナ熱さがナンダ、ナニコンナ
 寒さがナンダ、八寒地獄は何程寒むかろふ、八熱
 地獄は何位熱つかろふ、日本ナンカ熱ひと言つて
 も印度縮句よりは冷しひ、寒ひと言つても北清西
 比利亞よりは温かひ、結構な事だと考へれば直様
 寒ひの熱ひのと、言ふ様な横着な小言は、出ませ
 ん様になります、寒ひ時は寒ひの一點張り、寒
 ひけれども、それを苦にせねば寒ひがナント、無
 ひ、熱ひ時は徹底熱ひケレドモ、それには困らねば苦
 にもならん、言はと熱ひ寒ひと思惟する恐怖する、
 妄想分別を撲殺すれば、寒むかろふと熱つかろふ
 と、向様次第で少しも自分に關係せぬ様な大偉人
 に成る、是が寒暑往來大自由底の人です。
 斯言ふ風に解説したれば、乍入の人にも能く合點が
 できるかと思ふ、古則と言ひ公案と言ふ必竟學人平生

の用心を堅固にさせて、放過させぬ様に策勵する活歴史の原證である。

お師家は成丈け平易に通俗に簡便に了解せしめた方が手数を掛けず其の實を揚げ、隨心は餘り難儀心配せず、合點し實行する事が出来るのである、古則其の公案其のものが、直様自分のものに成つて、其儘實行することが出来ねば、ドンナに七縦八横に了解講釋しても、蛙鳴雀噪である、書餅空文であるから、實行さへ出来れば、判釋の仕方がソウ精密で無くとも、効用は多ひと思ふ、古人もソウ言ふ考であるよと思ふ、道人は信じて疑はぬ、今後は世の中が總じて多事多忙になる事であるから、一千七百の公案を一一三年も三月も考て居る様では、實地應用するには迂遠な事だ、何んでも一處通れば千處萬所一時に透ると言ふ風で、至極心易く合點させ、合點する様に致して貰ひ度ひと思ふ、餘り深く考へ過ぎて、茶の木鳥へ走り込まぬ様にするが肝要である。

○坐禪と用心

ので坐禪坐禪と言ふと、言ふ文句する仕業に窟着して、出身の地を失ふ様になる、本當の敵即ち妄想分別を撲殺する事が出来ず平生の左之右之に罣礙が生じる様な、用心の仕方ではイカン、平生心是道で道是坐禪坐禪是道と用心して修行するのが專一である。

○一心と成業

萬能達つて一心足らず、と言ふ事を舊時から能く言ひますが、實にツマラン事です、萬能に達する様な藝道が有り乍ら、一心の足らぬ爲に世の益を作さず、一代平々凡々で、萬能を能く使用せず濟む人が随分多し、吾宗義は元來萬能は達せんでも、一心は充分足つて居る筈の教育の仕方御座ひますに、近頃は萬能萬藝の方許り骨を折つて、學問をし修行をしても、イサ布教とか教導とかと仕業に取掛ると言ふ事になると、精出す人が少し、理想的人物は多しが實行すると言ふ人が少ひ様に成つた、今の老僧達を見るに随分一心の疑り塊りと言ふ様な人がある、人に感心させる程の學問もなく、人が歎賞する程の藝道もなくして、唯一心の充

坐禪と言ふのは、靜坐觀察する事で、早く言へば用心して居る、ホカン、せぬと言ふのである、兎角人間の意識は散亂し易い、トンチキ飛び廻ればヨケに散亂するから、靜かに坐りて心とは何物か佛とは何物かと、觀察するのである、坐禪も段々稽古が積めば、行も亦た禪坐も亦た禪と言ふ風になる、坐つて居らひでも心が靜かに落着けばソレが坐禪である、坐禪して居ても心が散亂して居れば妄想である、何んでも即所即心露現底で、分別せず了見せず用心を怠らぬ様にするのが坐禪である、柳生但馬守が澤庵禪師に劍術の奧義を授つた、其奧義がコッである、イヤと言ふ場合に、敵味方が氷の刃を引抜いて立向ふと、敵の劍が名劍だの敵が名人だの、自分のが銘刀だの自分が達人だのと、思ふと、早や其の思ふ妄想の爲に切先が鈍ぶる、何んでも切抜いたら敵を切伏せる丈の考へで、餘念を離へず戦ふのである、ソウすれば即ち一心である、一心程強ひものは無ひので必ず勝を制するとの事であると、斯ふ言ふ風に教へたこの事である、坐禪もソナンも

實する所から、随分立派な事業を成功した人がある、當時は只口の人には澤山あるが手や足の人が無ひと、或人の話だが、吾宗なども實際口で許り喋り立てても、手や足で働くと言ふ人が少ひから、振はぬのであつと思ふ、威儀即佛法、作法即祖道、と言ふ様な事を實地に應用し、來りし叢林なうでは、又格別精勤無間と言ふ風でなければイカン、何んでも自分に了解した丈の道理を自身に行ふと、言ふ事にならねば行解相應とはならん、何程學問をし修行をしても、之を實地に應用せねば濟世利民と言ふことにならん、自未得度先度他の佛事佛行ともならん、學問をし修行をするのも必竟は之を應用する爲の仕業で、應用せぬ位なら學問や修行をせぬ方がエイ、さて之を實行すると言ふ事になると一心で無ければ出来ぬ、誠實で無ければ行はれぬ、精神一透何事か成らざると、言ふから精神が一透すれば何事も成就するので、志ある者は事遂に成るとも言ふから志氣さへ堅固であれば自分の願行丈は遂げ得らるゝものである、精神と言ひ志氣と言ふも一心の變

名で、ツマリ一心さへあれば社界は自由自在に獨歩横
 行の出来るもので、天上天下唯我獨尊と言ふのも、一
 心の作用を表示した確言である、一心の不定なる人は、
 縦令ひ萬藝萬能に達して居ても、一代成功する事業を
 企畫することは出来ぬ、萬里一條鐵と言ふ風に、確固
 不拔の精神を操持して、十年如一一日と變心改易せず、
 進行する則んば人の養成を得天の補助を蒙り、必ず自
 己の發願した丈の事業は成功して、宗門佛教の爲とも
 なり社界の爲ともなりて、有益の人物と言はれる事に
 成れるものである、黄檗の鐵眼禪師が五十年も精神一
 透に従事せられて、始めて黄檗版の一大藏經の出版
 が出来た、吾宗の正山禪師が三十餘年も頭出頭没して、
 艱難辛苦せられて始めて宗門亂脈の改正が出来た、な
 どはツマリ火に入つても焼けぬ水に入つて溺れぬ、と
 言ふ精神の鞏固なるため、其の素志を貫徹して、千歳
 の下美名を流傳せられたのである、ドゥモ此の大切な
 る一心と言ふ事が、日増薄弱に成り行く様な心細い考
 へがする、老僧達より中年の和尚達より少壯の雲水

達と段々、智識と言ひ癡能と言ふ點は或は進歩の項目
 があるかも知れぬが、此の一心と言ふ事になると、實
 際一級下りにも二級下りにも下落して行くのは、争ふ
 可らざる事實である、唯只利口の人達が増加して、純
 行實踐の人達が減少することに成つて行く様である、
 社界も發達して學問は何學でも、專門専門と言ふ風で
 各自得意の學問を、専攻するのには、宗門の人達は、餘
 り萬藝萬能主義で、何んでも少しづつ、生嚼りをして、
 何に一ツ得意でイヤと言ふ場合に、使へるもの無い
 人達許りである、ツマリ一心の足らぬ人達が多ひ、叢
 林などでは餘外の事は、總べて抛却して此の一心丈を
 鍊磨する場所、叢林出身の人は、藝能は餘り達せぬ
 でも、一心と言ふことは、宗門獨歩で無くてならぬ筈
 であるのに、當世は此の一心の衰頹は甚しひ、其中に
 も一心の皆無と言ふ様な人が、叢林出身者にあるのは、
 實に慨歎の至りである、お師家其の人も向後なるべ
 く、精神教育の方へ氣を附けて、一心の充實する人物
 を養生する方針をとり、雲水其者も一心の確實なる様

に修行をすると言ふ考へでやつて貰ひたひ、世の中が
 段々複雑になり繁忙になり、生存競争上から僧侶とて
 も、出世間だの別世界だのと、濟して居る譯にも成ら
 ぬ様に成つて来たから、彌よ精神的の人物となり、各
 自率先に實踐躬行して、社界の人達より無用物視せら
 れぬ様に成らねばならぬ、一心は成業の基礎、成業は
 一心にある事で、一心の盛衰は直に佛門の盛衰に、相
 關聯して居るから、何んでも叢林は一心の養生所で、
 無ければならぬ、雲水各頭能く善く注意せられんこと
 を希ふのである、至祈至禱。

叢林畢

叢林茶話。一心と成業

- 五誓
- 一 減善提道心故不妻帶
 - 二 三衣一鉢任雲水。去住隨緣不定家。
 - 三 獨步乾坤無執着。貪心爭弄有情花。
 - 四 剃髮染衣興誓願。捨身懸命濟群生。
 - 五 佛家金鉢盛衆肉。無道何堪食有情。
- 増狂癡慢心故不飲酒
- 決死出家耕福田。方袍圓頂事參禪。
- 將來不飲狂癡酒。一到精神學佛仙。
- 惜寸光分陰故不喫煙
- 今日宗門事業繁。魚眉要務目前存。
- 喫煙閑話過時節。必竟如何報祖恩。
- 捨名聞利養故不裝飾
- 錦裝綾飾爲何用。慧眼看人破塵埃。
- 慚愧胸中無一物。豈耽名利效冠裳。

116
220

明治三十五年九月三十日印刷
明治三十五年十月五日發行

不許
複製

編輯兼發行人 武田泰道

愛知縣尾張國海東郡菴津村正法寺住職

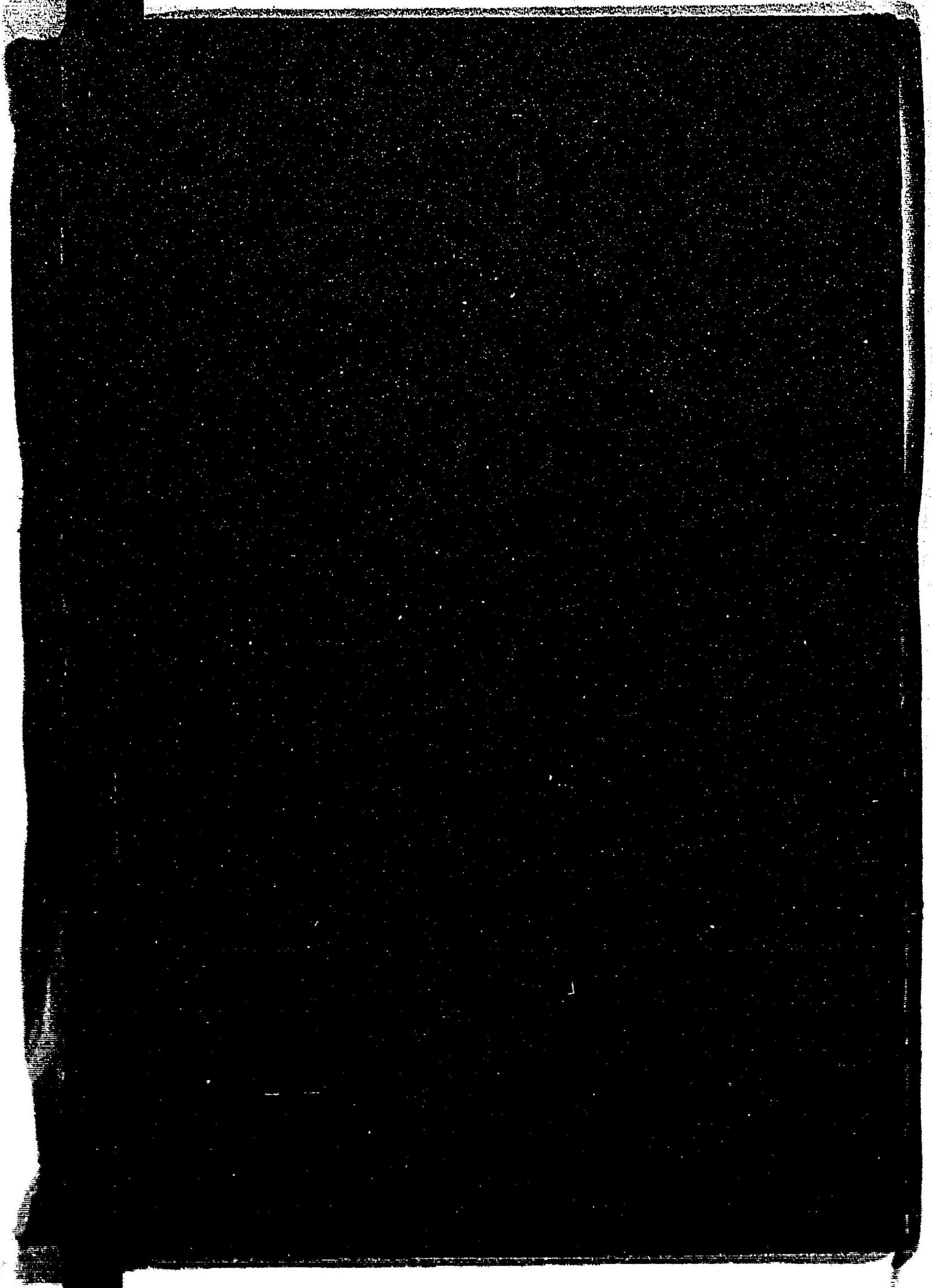
印刷人 渡邊慶太郎

愛知縣名古屋市傳馬町三十五番戶

印刷所 名古屋圖書株式會社

愛知縣名古屋市傳馬町三十五番戶

116
220



116
220

019708-000-5

116-220

叢林

武田 泰道/著

M35.10

ABG-0509



116
220

周

周

周

周

林